

山本武の「陣中日記」中

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-06-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 隼田, 嘉彦 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/5927

山本武の「陣中日記」 中

隼 田 嘉 彦

はじめに

本稿は、日中戦争に「出征」した山本武の日記の翻刻であり、次の三冊分が掲載される。

- 3 昭和十三年三月十八日～五月五日。
- 4 昭和十三年五月六日～八月九日。
- ⑤ 昭和十三年八月九日（承前）～十一月三日。

三 翻刻

凡例

各手帳を、先掲の番号に従って、第一冊、第二冊～第七冊と称することにし（○印は省略）、それぞれに解題を付け、本文は日記と覚書の二つに分けて印刷する。本号には第三冊から第五冊まで収録される。翻刻に当たっては、できるだけ原本の雰囲気をもつことのないように心掛けたが、概ね次のような方法に従った。

(1) 見出しの日付は統一的な表記にせず、横書きの日記の算用数字を漢数字に改めたほかは、曜日・天候、「二十」「廿」「三十」「卅」など、全て原文のとおりである。

〈例〉 二月二十九日、書き替えた場合は、「廿」
「卅」を使わない。

(2) 鉛筆・筆・万年筆の区別は、その都度本文中に示した。

(3) 片仮名と平仮名および仮名遣いは原文のままとした。

(4) 漢字は原則として常用体に改めたが、一部旧字体を残したものもある。

(5) 誤字・当字・送り仮名のほか武の書き癖などは、意味が通じる限り訂正せず、注も施さなかった。

〈例〉 いたゞく（いたゞく）、はじこ（はしご）、お話し（お話し）

背ノ（背囊）、上ト兵（上等兵）、特ム（特務）など

ただし、偏や旁などの間違いや書き損じに類するもので、態々作字するには及ばないと判断されるものはこの限りではない。

(6) 本文中の数字は、漢数字とローマ数字はそのまま用い、算用数字は、年月日のほか人数・年令・分量・距離・番地など漢数字

に改めたが、軍隊用語や箇条書の条数など、一部原文通りにしたのもある。

〈例〉10米(一〇米)、100人(一〇〇人)、改める場合、年月日のほかは「十」「百」を使わない。

(7)福井県の地名には傍線を付けた。中国の地名は原文を尊重したが、一部「昭和十二年参謀本部南支那十万分一地形図」(國學院大學助教授林和生氏に見せていただいた)のほか、『従軍記録』『行動概要』などによって改めたものもある。

(8)校訂者による注はすべて()を付けて示し、概ね近世史料集などの約束に従って、傍注に(ママ)(脱)(カ)(衍)などと付け、全体にわたるものは片仮名混じりとした。そのため原文の()などはすべてへへに改めた。なお、破損や訂正・抹消などは、□・△・■で示したが、一部無視したものもある。また会話の記号は「」や「」など区々であるが、原文通りにした。

(9)句読点と改行は原文を尊重しつつも、校訂者において改めた部分もある。ただし、その区別はしていない。

(10)絵や略図のほか、文字が斜めに書かれたり、重ねて書かれるなどしているため、そのまま印刷しにくい部分は、(写真9)(写真10)と本文中に一行取って注記し、写真を各冊の末尾にまとめて載せた。したがってその部分の釈文はないが、わかりやすくするために一行ほど重複して印刷したものもある。またいくつかの写真には、簡単なコメントを付した。なお、写真の番号

は通し番号とする。

(11)書名のほか映画や芝居・歌謡曲の題名などには、適宜「」を付けた。

(12)武が感動して大きな文字を書いたとみられるものは、稍大きめの文字で印刷した。

(13)欄外に書かれたものは、(欄外)と注記して適宜本文に挿入して示した。

(14)覚書の部分には一頁毎に*印を付けた。ただし印刷の順序は解題に示す。

最後に二つのことについてお断わりしておきたい。一つは、これらの日記が戦時中のものであることに起因し、かつ戦前にはごく普通に使われていたものであり、武のみが特別に使用したわけではないけれども、現在では使用してはならない語句が見られ、当時の偏見に基づく記述があることに關してである。本稿は史料紹介であるのでそのまま用いているが、もとよりそれを認めたくないのであることではない。

二つ目は、本稿を草するに当たり、多くの方々の御教示を得たがそれらについては、本連載の終了時にまとめて謝意を表させていたきたい、ということである。

一九九六年六月二三日成稿
一九九六年八月 六日補稿
一九九六年八月一五日補訂

一 解題

形態…表紙に「皇軍日記」とある小型の手帳。日記の部分は六一枚、すべて万年筆で書かれている。タテ一・二・五×ヨコ八cm。右開き。縦書。扉の次の見開きに「揚子江沿岸要図」という五色刷りの地図、次の見開きには二重橋の写真と「君が代」の歌詞があるが、本稿ではいずれも省略した。各頁は、上部に「昭和 年 月 日」「天気」「寒暖」「予記」の欄があり、適宜書き込むようになっていて、その下に一〇行分の罫線が引かれ、日記本文はここに書かれている。三月二十一日までは曜日も記入されているが、わかりやすいようにへゝを付けておいた。

手帳の後半部分に「通信メモ」(ミシン入り)用紙が数枚あり、ここに覚書が前から記されている。次に「日常支那語」が四頁あり、数字や簡単な会話が日中両国語で印刷されている。次に会話を自分で記入する欄も三頁分あるが、ここには何も書かれていない。その後「上官氏名」「戦友氏名」「氏名」「住所」欄が六頁ある。最後に「手控」といって、本人(持主)の「本籍」「住所」「姓名」「所有兵器番号」を書く欄があり、ここに武の自筆(万年筆)で

「福井県丹生郡吉川村平井

上海派遣吉住部隊気付脇坂部隊清水隊

陸軍歩兵伍長 山本 武

とある。その後に「北支那方面要図」という五色刷りの地図があるが、これも省略に任せた。

表紙…薄い草色の布表紙。右のごとく「皇軍日記」で、武の自署などは、裏表紙の下方左端に「山本伍長」と、万年筆でやや太めに記されているのみである。

内容…第二冊は、昭和十二年十二月二十四日、南京から南翔方面へ転進、劉河鎮に入った翌一月十日までであった。武の日記はこの後暫くなく、第三冊は三月十八日から五月五日まで、いわゆる徐州会戦に至る記録である。『従軍記録』によれば、劉河鎮での警備生活は、朝鮮人の誤殺事件や拳銃による過失致死事件があったほかは、おおむね平穏な日々であったという(一一三頁)。四月十二日出動下令、十七日に出動が始まり、蚌埠進出のあたりまで触れられている。

なお、四月十六日や二十三日などのほか、第四・五冊にも見られる記録に関連することだが、富士夫氏によれば、武が決して慰安所に行かなかったことについては、複数の戦友の証言がある由である。随所に見られるハルエに対する温い愛情からみて、宜なるかなと私は思う。本稿校訂中に偶々目にした岡部伊都子「性」(『世界』六二五号)などを見ても、慰安婦を拒否するのは極めて困難だったようであるが、二人の健康な愛情に深い感動を覚えたことを特に記しておきたい。

二 日記

三月十八日(土)晴

駐屯以来三月余り、楽しい警備気分を味ひ、漸く土地にも狎れて来た。劉河鎮を引き上げて、いよ／＼本日、新駐屯地青浦に向つて移駐行軍をする事になった。

午前五時起床、慌しい出発準備。毛布の梱包、御座の梱包、班内の清掃等々。

午前七時半整列、先づ大隊緊急集合場に向つて行く。大隊八時整列完了。八時十五分大隊長の訓辞あり。伊藤大尉の指揮の下に予定の進路を行軍。

天気は良く、暖かで、軍装した我々には暑い位。正午羅店鎮に到着、昼食。松田曹長・土田伍長及大瀬准尉等は、事務の關係上此処より嘉定行き。約一週間滞在との事なり。小沢・勝本君等は、先発者として自動車に乗り、笑つて御先に御免とも言はずに行つてしまふ。汗を流して歩く我々、あほらしくなつてしまふ。

午後一時半頃、懐しの張家角を過ぐ。始めて敵弾を受けた所だけに、当時の林隊長を中心とした百九十四名の者、皆揃つて居た頃が思ひ出されてならない。牛を殺して食べたのはあの堆土の処だし、「俺達の泊つた処はあの家だ」「此のクリークの水で飯を炊いたのだ」此処のところ砲兵の者がやられたのだ」「此の道から来た、此の道を南進して第一線へ土囊運搬をしたのだ」「此の右側の家の中で、我々が任務を貰つて出かける時、しつかりやつて来

いと、中隊長殿自つからお酒を下さつた、あの時の中隊長の懐しいお顔、元氣なお姿が目には浮ぶやうだ」等々、此の張家角のみでも幾多の思ひ出がある。あの頃は、馬来田少尉も飯田少尉も小倉准尉も、南伍長も沢崎も、皆々居た。

「我々だけでも揃つて無事で働きたいね」と、分隊長が一口同音に、しみ／＼語り合つて居たのも此処だった等……。

考へ居る中、部隊は早や劉河行に着く。此処は、我々が第一線に出で、孟家宅攻撃をやつたのも、此の部落から出かけたのだ。此処で休憩、それよりいよ／＼大場鎮目差して行軍を続く事約一里大きな紡績工場の残骸がある、劉菴と言ふ村である。此の附近より真茹無電台が見え出す。上海のであらう、大きな塔も見え出す。然し、人々は段々疲労が出て来て、皆々つらさうである。足の痛いもの、のどが乾いて困つて居る者。

午後四時半頃大場鎮に到着。此の附近は、流石かに大激戦地だったと見え、戦跡も又物凄いものである。此処にて、細川伍長等設営者迎へに来る。それより設営者の誘導により、濮家宅と言ふ部落に宿営と決す。第一小隊落伍者無し。各小隊も無しの如し。午後五時半なりき。

先発者土本君の骨折により、夕食の準備あり。早々夕食をすます。

夜間警戒法

各小隊家毎ニ銃歩哨一名宛立哨セシメ、附近ヲ警戒。服装ハ執銃帯剣。第一小隊ハ、本日ハ一分隊ヨリ一名宛トス。

三月十九日(日)曇

午前七時半整理、大隊は八時道路上に集合、行軍を開始。八・五・六MG大行李の準備。

真茹無電台・真茹駅・鉄道を越えて、蘇州河の方向に出る。

午前十時半頃、北新涇鎮を過ぎ、一路世家衝に向って出発。途中、支那人の荷物を運んで居る者、人力車・一輪車、時々クーニヤンの奇麗なのが人力に乗って通る。恥しきうに顔をかくして居る。

思ひ出深い施家衝の外れで昼食、八字橋寺院も見える。我々が使った屋根裏も見える。敵の頑張った柳の株も見える。施家衝のあの我々の掘った壕はあの辺だ。今は亡き、島田・道念・長谷川・坪田君等の事を思ひ出し、一時黙禱を捧げる。

午後〇時出発、思ひ出深い戦場を行軍。大山大尉戦死位置、お墓に拝礼して、十一月九日我脇坂部隊ニヨリ占領した、虹橋飛行場に出る。此処にて互に当時の戦ひの模様を話し乍ら休む。戦場見学者の顔も見える。

大隊は此れより道を右手に取り、一路青浦に向ふ。道路は極めて良く、内地でも珍しい位。支那人を乗せた自動車が、ひっきり無しに通って行く。坦々たる街道を進む。雨かと気づかわれた雲行きも、段々晴れて来て暑い事、汗だら／＼である。

午後四時二十分頃、張鑄江と言ふ小部落に到着、宿舎に入る。昨日とは異り、此の附近ハ戦禍甚しき形跡なく、家屋も殆んどこわれては居ない。田舎にしては相当立派な家に泊る。菜種の柔い野菜汁もおいしいけれど、土本君が早くより来て、大きな鯉を一匹料理しておいてくれたのには、全く珍しく、おいしかった。

今日はすっかり疲れきってしまふ。支那酒も永く飲まず、腹が空ったためかともうまく、数杯呑んで又酔って寝てしまった。
本日第一小隊落伍者。

牧野昌直・酒井与一・小川久次郎

右自動車にて先行の如し。

三月二十日（月）曇後雨

午前五時起床、六時半整理。大隊ハ七時出発、青浦まで約三里。足の痛みも打ち忘れ、希望を胸に軍歌演習をやりつゝ、二度の休憩の後午前十時少し前、先発者、舟で来た者等の出迎への中に、青浦に到着。栓皮大隊長の訓辞、設営の話等あつて、午前十一時頃新宿舎に入る。

此の町は相当インテリも多いらしく、服装も一般に良好である。空爆・砲撃等も少しは被害あるらしいも、劉河鎮の如き事なし。家は立派であり、電灯も着いて居る。

丁度我々の兵舎には、大日本特務部宣撫班及支那の巡查が居た処である。我等が入ると共に出かけて行く。井戸はなく、前のクリークの水を使用す。室の分配等の関係で仲々むづかしく、今晚は仮宿、明日改めて宿舎を定める筈である。

三月二十一日（火）晴

午前七時起床。起床と同時に分隊の宿舎分配。いろ／＼案を持ち出し、結局第一、第三小隊ハ現兵舎、事務室・幹部室も同じ。第二小隊ハ約百米右方別棟とす。分隊全員一致協力よく設備に精出し、早々立派な班が出来上る。下士官室は二階最右室、第一、第

三小隊下士官七名全部入ることゝす。多忙なる一日であった。午後七時、分隊長ハ中隊長の下に集合、種々注意を与へらる。

一、命令・会報の伝達(アタ)の徹底及実行ノ監督。

二、

二月二十二日 曇後雨

午前中舎内外の設備をなす。午後巡察勤務を命せられる。四時より一人巡察に赴く。未だ設備ならず、所感多し。雨降り、衛兵勤務も樂ではなし。上番・下番とて、洵に兵も御苦勞であると思つた。城壁上より四圍を眺めると、全く奇麗である。内地の風景を思ひ出す。

歩哨にして、極めて無神経な服務の者あり、又、上司の注意事項を厳守せざる者もあり。帰りにⅡ本部に行き、河端兄さんを訪ねる。元氣である。面白い話しをして愉快であった。兄さんもとても帰りたいらし。さだ子の事も、全く一心に思つて居て下さる心根、嬉しく思ふ。

午後七時、全員石廊下集合の際、巡察官として注意事項を達せり。中隊内務規定も出来た。仲々鯖江に居る以上に軍紀はきびしい。

午後九時再び巡察を行ふ。異常無し。

二月二十三日 曇

午前八時、昨日の巡察報告を中隊長殿になし、併せて意見具申もなす。それより炊事へ遊びに行き、面白く話をして帰る。

もう中隊兵舎内外の諸設備も行き届き、一寸今日は暇になつて、雑誌を読んだり、手紙も少し書いて見る。

本日命令により、下牧・田中・宮本・芳野上等兵等、伍長に任官す。ほんとに目出度い事だと、喜んで居る次第なり。夜、本日开始して入浴沸かす。長らく入らなかつたゞけに氣持良し。入浴場の混雑又大したものなり。晩、二小隊の下士官遊びに来り、相変らずのおのろけ話しをして笑ひころげ、十時頃寝に就く。

三月二十四日 晴

久しぶりの晴天、段々暖くなって来た。午前中室内にて諸事務をなす。午後一時より、伊戸少尉指揮の下に教練の爲め整列。衛兵上下番者、其の他各勤務使役のため、出場人員僅かに二十四名なり。

北門より場外に出てる。(み脱を)城内は人の居るや居ないか判らぬ位、ひっそり閑として居り、昼夜を問はず戸を閉めて居るのに、一歩外へ出るならば、直ぐ市場通り。ズラリ並んだ店々、魚もある、卵もある、肉も野菜も日用品も、何でも販売して居る。お客が黒くなる程居り、呑気にブラ／＼して居る。殊に茶店の繁昌は又大したもの、皆々湯吞を抱へて笑ひ興じて居る。戦前の蒋介石華かなりし頃の気分でも味つて居るのか、皇軍より離れた処が却つて繁榮して居る様子、何だか矛盾して居る様でもあり、可愛さうにも思はれる。然し、此の地方の土民が、依然旧政府時代を追想して居るかと思ふと、腹が立つてたまらない。

横に並びて我々の行軍を見て居る支那人、帽子を取らない者はドン／＼叱りとばして、我等の威厳を示す。クリークを左に見て進み、町外れに出で、次の部落に入る。水牛が居る、洗濯物が干し

である、そこを通り抜けると次は桃畑である。早はややくも桃の花がちら／＼咲き始め、赤い可憐な枝振り、一枝手折って見る。下は一帶の草、これらも春を知り、小さな赤い花をつけて全く奇麗である。此の附近に於て約二時間、伊戸少尉を囲んで面白く話して過す。

午後三時頃帰隊す。入浴に行く。今日の御馳走はテンブラ、おいしくいたゞく。お酒を一寸飲んで陽気になる。時に外へ出るのも又愉快なものである。ハイキングと言った感じがする。

支那は全く水の便の良い所だ。南船北馬とはよく申したもの。青い草原の彼方を帆かけ舟が通る、ボートにクーニャンを乗せて通る。櫓を漕いで行く老夫、面白く感じた。

三月二十五日 晴

本日上番、東門衛兵を命ぜらる。午前中は服務計画表(マツ)を作整し暫く休む。十一時半整列、正午交代服務。新東門後哨、物品監視哨一人、宿舍、II本前正門、展望哨と司令以下十八名である。

此の間巡察時とは異り、今ではすっかり奇麗に取片付け、設備も良くなり、服務にも便利である。それに今日は、天気は薄曇り乍らも暖く、東門前の自動車待合所には、沢山の支那人が上海方面へ行くのであらう、二時間も三時間も、自動車の来るのを待つて居る。老人も居る、青年も子供も、奇麗なクーニャンも見受けられる。金持らしいのもあれば、貧乏人らしいのもある。

巡察に行つて挙動不審者を見歩くと、若い娘達は袖の下に顔をかくして、恥しそうにして居る。思へは支那民衆は、全く可愛さう

なものである。

自動車が三台つらなつてやつて来る。大入満員である。降りる者乗らんとする者競うて居る。舟の船頭が客を引く。荷物を運ぶ。ワア／＼／＼大した騒ぎである。

衛兵服務者は皆々まじめな者ばかりであつて、非常にやりよかつた。巡察がてら、展望哨下の公園を見て来る。此処にこんな立派なものがあらうとは、思ひがけなかつた。戦禍を蒙りて見る蔭(ツツ)もないとは言ひ乍ら、仲々金のかゝつた立派な庭園である。池には鯉でも居るのか、時々バサツとあばれて居る。展望哨台に上つて四方を眺める。広々とした視野に写る者、それは全く戦塵を外に一副(ツツ)の画である。

直ぐ眼下には、円く城壁が半円形を描いて居り、豪壮な建物が町中ズラリと立ち並んで居る。古代の町を見る様な気持さえする。更に城外を眺める時、青々と何処までも続いて居る麦田、縦横に伸びて居るクリークは、一ぱいの水を湛え、そこには呑気さうな支那人が、ギイ／＼／＼櫓を漕いで行く。帆かけ舟が通る。青田の真中の、上海通ひの一本道には、自動車が砂煙りをたてゝフルスピードで走つて居る。全く平和そのものゝ風景である。どうして此処に、四ヶ月か五ヶ月前に銃砲声イン／＼と轟き、尊き人命を奪ふやうな物凄い大激戦が、繰返へさりしと思はれようか。感想はそれからそれへと続く……。

「班長殿、此処に居ると時間の経つのも忘れてしまひます」と言ふ歩哨の声に、ハツと我に還り、「ほんとにそうだな」と言つ

て、次の巡察の爲め下に降りる。帰りに公園内にこぼれ咲くすみれの美しさに、我知らず二、三株取り来り、通信紙の中には喜んで押葉を作る。此れを手紙の中へ入れて、彼女に送ってやらうか等、何を見てもはるゑの顔が思ひ出される。

午後八時過ぎ点呼報告に行く。下士官室に立寄って見れば、丁度先月送ってくれたはるゑよりの、待ちに待った小包が来て居る。余りの嬉しさに、小包の紐を解くのも間違しい。気がいらくする様である。上の包みも中の包みも、皆彼女の真心こめた針の跡。懐しさに口吻けしてやりたいのを、人々の手前さり気なし。

中を展げる。真綿チョッキ・腹巻・お菓子・手帖・便箋、コンバクト・主婦の友、それにまだいろく／＼の糸・針、紙てまりまで入れている。優しい心づかひ、何とも言へぬ喜びだ。

手紙の中には常に変らぬ愛の手紙、一途に思ふ真心がこもって居り、めんくたる愛の熱情がみなぎって居る。そして、私は幸福者よと言ってくれる、清い／＼の心の持主はるゑ、どんなに俺の凱旋が待ち遠しい事だらう。凱旋出来たら、如何なる事をもして、きつと／＼幸福な妻としてやらねばならない責任があると、強く／＼感ずる。恋する女は奇麗になると言ふ。彼女も、美しい上にも更に美しくなつて、僕を迎へてくれる事だらう。

あゝ楽しい日よ早く来い。

翌日は直ぐ様手紙をやらうと心賑やか、いやな勤務も何となく今晩は朗らか、心は踊り少しも待屈せず、氣持良く過した。

二月二十六日 曇

昨夜は暖く、おまけに木炭多々の有、火をカン／＼に起して暖かだった。皆まじめにやってくれて事故も起らず、殊に水上・稲木両上等兵が、しっかりして居てくれて幸ひだった。中隊へ点呼報告、明るくなれば時間は直ぐたつてしまふ。正午、無事交代して帰る。

早々にはるゑに長い／＼感謝の恋文を書いて出し、楽しい思ひをめぐらし乍ら、午後四時頃まで寝る。

本日大瀬准尉殿帰られる。

夕食後、一、三小隊下士官と共に会食、一ぱい飲む。相変らずの飲み助、朗らかな准尉、楽しみだった。

午後七時より、中隊の演芸会を行ふ。

三月二十七日 晴

准尉殿帰られ、早速今日より生存者の功績をなす。

先づ、生存者の殊勲者の殊勲時の功績事項の原稿を複製する事となり、此れが原稿作制にかゝる。今度は戦死者とは異り、仲々むづかしいとの事故、詳細ニ至り記載す。夜十一時迄。

三月二十八日 晴

昨日に引続き事務をとる。

中隊東口より井戸掘りを始む。天気良く暖かなり。

中華民国維新政府成立し、本日青浦ニ於ても祝賀会催され、旗行列等賑やかであった。

三月二十九日 晴

朝から終日功績室にて事務、多忙なる事今までにない位、夜業十

一時まで。夕食は准尉殿等と共にす。

本日始めて写真屋来り、一枚記念撮影をなす。早く出来たらはるゑに送ってやりたいものだ。

芳野上等兵帰る。

三月三十日 晴

昨日に引続いての作業。少し風冒(フウゴ)を引く。

今日は又、一日に十五本の手紙・葉書を貰ふ。はるゑから四本もらふ。優しい心づかひ、うれしい。

今日、北山の問題にて頭を悩まし、全く困却す。

本日中隊警備行軍。

黒川上下兵内地遺骨還送。

三月三十一日 晴

原稿作りだけは早朝終了。それより要図作製にかゝる。一人に対して功績名簿五枚もつかひ、要図も五枚も書くのでは仲々である。

午後十二時半まで夜業。

本日中隊炊事にて賭博拵、皆々顔色なし。

四月一日 晴

余り毎日夜業をしたので、かぜ段々重くなり困る。然し、大した事なし。本日夕までに大方終り、明日は少しは楽になるかも知れない。

四月二日 晴

中隊休日なり。然し、功績の始末あり、休まれません。少々曇る。然し暖い。

今日まで手紙少しも出されず、今日少し出す。

休日と言ふと、やはり少しは楽しみだ。午後六時より又余興会をなす。面白かった。途中で中隊長の命により、日本部へ行く。三

島伍長と久しぶりに会ひ、面白く話し合ふ。三島も相変らず、功績事務で多忙を極めて居る。坪田軍曹も帰られて福田と三人だ。帰ってから再び少々事務をなし、夜は少し早く終ひ休む。

四月三日 晴曇

神武天皇祭のよき日である。珍しくも今日は少し曇り勝ち。

正午、殊勲者の奏功時の状況を書いたものだけ呈出す。午後は略歴の準備のため戦時名簿を写す。

此頃晩寝晩起がくせになって、晩はどうも寝くない。十一時半頃まで寝室で騒ぐ。

四月四日 晴

もうすっかり春になりきって、そら豆の花が咲き、桃は散り、緑の色も木々に吹き出し、内地の二十日頃以上の景色である。

第三大隊の方面では、伝染病患者の発生を見たとか、そろ／＼暖くなると注意を要する。

四月五日 晴

今日慰問袋分配せらる。一つは軍のよりの支給、日用品一袋。もう一つは二人に一ヶで、金沢市安江町浅池芳子と言ふ人からのを貰

った。二人に一ヶではどうも物足りなく変だ。手紙も入って居ず、案外淋しい気だ。

相変らずの事務である。午後命令により、中隊ハ明日〇〇方面に

討伐に赴く事となり、夜十一時頃全員起床で命令を達す。

四月六日 晴

中隊は午前五時起床、出発準備を整える。七時整列、全員背囊を除く軍装。背負袋を作り、正に第一線出動の装束である。七時半出発にて敗残兵討伐に出動す。俺は皆んなの無事を祈りつゝ見送った。

後は寂しいもの、中隊ニは僅か二十数名のみである。天気はよくとても暖い。むしろ暑いと感ずる位である。

今日上等兵進級の命令出で、俺の分隊でも土本・小林の兩名、上等兵を命せらる。東・高間もしてやりたくても、如何ともし難し。他の分隊では、まだく可愛さうな者もある事故。

四月七日 晴

今日の暖かき、まるで内地の六月のやうである。暑くてく汗が流れる様である。外は暖風、菜の花も一面に咲き、草の芽も伸びて、全く春は何となく楽しい。それにしても内地の此の頃は如何やら、嘸花見に行楽にと、賑やかな事であらう。

夕食に委員会から沢山の支那料理を御馳走してくれる。皆んなで十八種もある。おいしいもの、気持の悪い者、いろいろである。一般に油びつこいものばかり、いやになってしまふ。後から支那の子供に分けてやる。沢山の子供が寄り集って、大した騒ぎである。入浴も少人数にて気持良し。然しそれにしても、討伐出動者に犠牲がなければよいが……。

四月八日 雨

珍しくも今日は雨降り、何だかいやな気がして、今日は仕事は休みになってしまった。マントー氏反応注射を受ける。

午後五時半頃中隊全員帰隊す。討伐も大した事なし。一人も匪賊は居なかつたそうである。行きも帰りも舟ばかり。

四月九日 曇

午前八時、大瀬准尉と土田君、事務打ち合せのため嘉定へ出張す。後に残された俺と内山君こそよい面の皮か。休日だけれど面白くもなし。一人はるゑの事でも思ひ出して手紙を出す。

夕方から余興大会、面白し。

四月十日 晴

午前中、内山氏と二人で事務をとる。天気は晴朗にして温く、何だか外へ出て見たくなる。午後はぶらくと遊んでしまった。写真屋来り、先日來待つて居たのが出来た。期待して居た程良く撮れて居ない。一寸老けて見えるし、やつれて見える。然し、早速と家へ一枚、はるゑに一枚、河端へ一枚送った。

四月十一日 晴

天気晴朗、内地は嘸賑やかな事であらう。事務も何だか気合が入らない。午後は、分隊員全員と海道小隊長を入れて記念撮影。それから、内山・小沢・斎藤・山本のメンバーで、皆裸になり、城壁を背景にスクラム組んで写真、それから城壁の上に昇り、腰かけて撮る。出来上がると、どんなに面白いのが出来る事だらうと、胸がとゞろく。城壁上から見た田圃の景色は、全く天下第一品だ。見亘す限りの菜種の花咲き、毛せんを敷きつめた様などはこ

んな景色か。

大瀬准備尉等未だ帰らず。

四月十二日 晴

朝十時頃要旨命令来る。

師団ハ出動ヲ開始セントス。各部隊ハ四月十四日迄ニ出動準備ヲ完了スヘシ。

いよ／＼出動である。

デマは飛ぶ。徐州か、漢口攻撃か、或は広東・香港方面か等々、全く判らない。然し、戦争に行く事には間違ひないらしい。

今日家から二十六枚の写真来る。あらゆる角度から故郷の姿を現して、思ひ出深いものがある。尚、同時にはるゑからも写真来る。

一番懐しい見合写真も入って居る。叔父さんのもの、兄さんのもの、彼女の幼い頃のもの、全く今日は写真オンパレードである。

いよ／＼出戦、何ら思ひ残す事なし。妙法に身を委せて、彼女の信仰を頼りに、今までの如く勇敢に働こう。

午後六時頃、土田伍長・大瀬准尉等嘉定ヨリ帰ル。昨夜ハ上海デ大散財をして、面白かつたさうである。

第五、第十一師団も出動するさうである。徐州へ攻撃に行くのが一番噂が高い。夜は准尉殿等と会食す。いよ／＼面白くなって来た。

今日冬島の山田君

四月十三日 雨後晴

一寸空模様が変わって雨だがすぐ晴れる。ぼつ／＼出動準備に取り

かゝる。

思ひ出せば今日は丁度、はるゑの所へ結納を持って行ってから、丸一ヶ年目である。彼女もなつかしく思ひ出して居る事であらう。

あの頃はたのしかった。大島君も居て、停車場で碁をやって居た。

一寸恥しいやら気の毒やらであつた。何と言つても、婚約時代位楽しいものではなく、今日の日の如何にうれしかったか。はるゑに婚約指輪を渡して、しなやかな手にやはめてやった時の心ときめき、始めて彼女の体にふれた時の、何とも言へぬうれしい気持、

今も尚忘れられないあの感触。恋しい／＼と思ふ様になつた第一歩は、やはり今日が始めてゝあつた。あれから後のラブレターのやりとり、俺は全く良い女と一しよになつたものだ。幸福である。

奇麗な笑顔、美しい顔、あゝ俺ははるゑの総べてが好きだ。どうしてこんなに惚れたのかしら……、なんて思つて見る。きつと彼女もそうであらう。此方で思つて居る事が、皆一々千里離れた彼女の胸までひゞき、彼女の思つて居る事が又、皆此の胸に伝はつて来るのだもの。

はるゑの情熱にほだされ……、楽しかつた出征前の生活。むしろひつこいと思ふ位のはるゑの情愛、思つても胸が鳴る。恋しい妻からの便りも、暫らく絶えるかも知れぬ。一番淋しい。

然し、俺は帝国の軍人、最後まで恋しい彼女の愛を一身に集めて、御国のために捧るべきのみ。幸福！を胸に秘めて……。

午後、七中隊の山田君、先発隊員として来る。二人でいろいろの話をして後、城壁の上を散歩する。

今日蓬生・川口等帰つて来る。清君も帰つて来る。皆来て賑やかになる。

四月十四日 晴

第九師団、いよ／＼本日より行動の開始である。先発者長谷川伍長・湯谷上等兵等出發す。

はるゑにも最後の便りを出しておく。

中大隊八十七日青浦出發、壮途に上る事となる。ぼつ／＼梱包等始め準備をなす。

四月十五日 晴

今日は平井のお祭日である。我等の出勤ハ知らないであらう。今年は内地も温かだとの事、桜花も済んだ事であらう。皆さん何処へ遊びに行かれるかしら。

中隊は唯々出勤準備、毛布も殆んど梱包終了。午後七時より軍歌演習、城壁上を歩く。帰りに三島君に会ふ。遊んで帰る。

(欄外)「チブスコレラ予防接種」

四月十六日 晴

出勤を明日に控へて仲々多忙だ。俺は本日直勤務に服す。起床と同時に夏衣袴を貰ふ。毛布返納、冬衣袴返納。

午前八時三十分より中隊長の学科、十一時衛兵交替、十二時半残留者出發、午後一時半より中隊軍装検査実施。午後二時より中隊全員外出許可等、とても多忙を極む。然し無事幾行事済む。

今日の外出は殆んどPへ遊びに行つたらしく、大した混雑だつたとの事。青春の情熱の浅間しき、あきれる。別におかしい事もな

けれど、きたない支那女のP買ひに自慢で行くとは、余り感心しない。俺は唯々はるゑの肉体あるのみ。総べてのほん脳(煩悩)を自制して、はるゑとの関係をば胸に抱いて楽しい。決して淋しいとは思はぬ。

午後四時頃、一〇一師団來隊、宿泊す。出陣を明日に控へて多忙極りなし。今度の目標は徐州の如し。あの方面の地図を張る。夜は毛布も全くなし。寒くて困つた。

四月十七日 晴

午前六時半平常通りの起床。直ちに出發準備をなさしむ。八時十分、分隊長以上集合にて、かつていたゞいた御下賜品をひろげ、晴れの門出を祝す意味に於て乾盃(乾杯)す。八時半整列、再び御酒・御紋菓等を兵全般に分配す。九時本部前広場に整列、新大隊長代理伊藤大尉の指揮の下に青浦出發、上海に向ふ。東門の前には、多数の支那巡警及P連中が送りに出て居る。今日の行軍の里程約九時里。

暑さは正に、内地の六月末か七月頃のやうであり、皆流汗にめまひするが如く、皆々ふら／＼になつて歩く。丁度上陸当時のあの行軍のやうである。でもどうやらこうやら、午後四時には虹橋飛行場を通過。更に前進／＼で、蘇州河の手向岸豊田紡の跡に午後七時半へ或ハ七時へ到着、宿泊す。

四月十八日 晴

昨日の命令により、俺は乗船地の人員搭載掛を命せられ、午後八時自動車により虹港碼頭に向ふ。途中、富士軍曹入院のため、上

海兵站病院に下車す。太田及前川に写真を言伝てる。

午後九時半虹港碼頭に到着す。丁度一大隊出発のため、沢山来て居る。思ひ出深い虹港！ あの上陸当時は、屍臭ぶんとして居り、弾の跡物凄く、激戦の跡生々しかったのに、今ではすっかりよくなつて賑やかである。酒保も出来、大混雑をして居る。我々の乗る弥彦丸は未だ来て居らず、仕事も何もなし。

正午、再び自動車にて、日華紡の大隊集合地へ行く。中隊の兵は皆々外出して誰も居らず、俺も一人バスに乗って出かけた。日本街で下りてブラ／＼歩いて居る途中、小松君や高間伍長・中西伍長等と会ひ、それより映画を見る。丁度、「ターサン」後編がある。此処を出て、次にニュース映画等見る。

午後五時半帰途に着く頃、伊戸少尉等に会ひ、三島伍長にも会ふ。午後六時半頃よりカフェーに入り、皆んなで大いに飲み、歌ひ、憂晴らしをする。面白かった。日本女も始めて、賑やかな街も始めて、此処に居ると全く戦争気分を忘れてしまふ。内地と同じだ。午後八時半頃帰隊す。

四月十九日 晴

勤務員は自動車にて午前八時出発、虹港に赴き、船舶の諸種の準備をなす。今日も相変らずの暑さである。酒保のサイダーが売れる／＼、大した騒ぎである。正午にはすっかり乗船準備完了。○時乗船開始。午後三時、いよ／＼晴れの壮途に上るべく出帆す。呉淞を過ぎ船は左に廻り、方向を南京に向つて逆航す。広い／＼揚子江、川と言ふには余りにも広すぎる。海だつて此れだけ広く

ない様な気さえする。濁流とう／＼、川中二十里、三十里とは想像以上である。一日中面白くもなき揚子江を逆上る。

四月二十日 小雨

夜間八、船は危険予防のため航行停止。夜明けと共に、再び濁流の中を船は動き出す。今日は段々川巾も狭くなる。然し、河と言ふ感じは出て来ない。それほど広い川である。午後、パイ缶・ビール・サイダー等、非常に沢山間食として給与される。河端の兄さんよりも、更にパイ缶五ヶをいたゞく。夕食前に分隊で会食す。飲んで歌ひ、とても賑やかだった。明日は到着、上陸との事。雨も小降りで大した事なし。午後七時再び船は定泊す。

四月二十一日 曇

午後八時頃、船は目的地たる南京・浦口中間地点に到着す。下船準備を整ふも、本日中ハ下船せず。船内に於て雑誌を読んだり、寝て見たりして無為に日を送る。思ひ出深い南京も、裏から見れば南京らしくもない。然し、あゝ此の南京攻撃に、如何に多くの犠牲者を出した事か。南京へ／＼と歩いた、あの追撃行軍の疲らさ。

思ひ出の光華門よ、さつまいもよ、大根おろしよ。荒廃した南京市も、今ぢや賑やかになつた事だらうな。一度見たいものだ。然し、恐らく再び此方へは来ないかもだらう。

明日よりいよ／＼徐州へ／＼。我等の意気高し。

四月二十二日 曇

午前七時半上陸開始、浦口に第一歩を踏み出す。鉄道内広場に整

列。下船勤務中の休憩時間を利用して、中隊長殿より、諸種の情況説明ある。

敵は約四十ヶ師と言はれ、相当頑強に最後の抵抗を続けて居るらしく、然し上海戦線のやうに、執拗に頑張りはしないだらうと言はれる。

最前線は、相当の苦戦をして居るらしい様子である。今聞くだけでも、相当兵力を送って居るらしく、第六、第十三、第三、第九、其の他多数の兵力らし。

午前十時頃、機関庫内に入り宿営準備をなす。此処は巾三十米、長さ百五十米程の大建物、第十二中隊が自動車隊の援護のため残り居る。峰金君と共にいろいろ話して居る内、思ひがけなくも高島藤順君訪ね来る。不思議な位の面会に、いろいろ学生時代の話しに花を咲かせて居る時、ふと一恵君を発見、「ヤア」「オー」懐しい叫び、青山清二君も居る。上田修一君・青山新作君、野村部隊の面々、戦斗間の話、友達の話。時に又山本正君が来る、師団輜重の木下一馬君が来る、此方は山田君・牧野君・清君も集って来る。故郷へ帰ったやうな賑やかさ。何時か折があつて会へたらなると、夢のやうに考へて居た事が、遂に実現した。ビールやサイダーを持って来て一ばい飲む。記念撮影もする。何時までもかうして居たくなつてしまった。隣同志で毎日顔を合せて居た者も、七ヶ月以上も別れて居ると、全くなつかしいものだ。午後七時頃、彼等は名残惜し気に帰る。

明日は汽車で出発だと言ふ。一寸寒くなつて来た。早々休む。

四月二十三日 雨

II大隊主力及第十二中隊は、我々のみを残して出発す。雑誌を読んだり、ハーモニカを吹いたりして無為に日を送る。雨は降り、何となくやるせない気持だ。昨日が余り思ひがけなく楽しかったのが、今日は何もないからかも知れない。午前中お湯へ行き、散髪をして気持良くなる。

午後、酒保へ行って見る。十五錢Pがあるとか、三十錢Pがあるとか、分隊の兵共が騒いで居る。支那の人妻共が、生きんが為めに貞操を提供して、軍人にサービスすると言ふ話。ほんものゝPもあり、酒保より帰りにのぞいて見る。余り奇麗な娘は居ない。此の間上海でもつくづく思った。はるゑより奇麗な女は、上海広しと言へども大して居ないものだ。或は俺が余りにはるゑを恋して居るため、はるゑ以外の女はおかめに見えるのかも知れない。然し、妻に惚れるのは一番うれしいことだ。Pを見てもやはりその通り、あんなけがれた女なんか見ても、少しも慾が起らない。はるゑくく、俺は断然はるゑでなくては修まらない。

夜は天幕とむしろを着て寝る。案外暖くねむられる。

(欄外)「本日午後五時、山本伍長以下十一名斥候へ地形偵察」

四月二十四日 雨後曇

午前六時半整列、徐州に向つて出発す。雨降りしきり、全く困る。輜重隊の援護である。師団輜重は、一ヶ中隊約八百名とか。それが七ヶ中隊もあるのだから大したもの。今日、第二、第五の二ヶ中隊、第四野戦病院等二里も続く。大したものである。

行程約七里を更に伸ばして、烏衣鎮(居)に午後四時到着す。今日の行軍は雨のため全く困る。昼食は雨の中、まづくて食べられない。然し午後は、背ノを輜重車に頼んだため、案内楽であった。

烏衣鎮はとても悪い町である。浦口より津浦線一带は一般に民家少く、あつても藁ふきて悪い家ばかり。それも多くは焼きはらつてある。江南とは雲泥(アヤ)の相異、一寸満州式の村が多い。

本夜ノ警戒

下士哨

- | | | | |
|-------|----|-------|------|
| 八・ | ―― | 九・三〇 | 第一分隊 |
| 九・三〇 | ―― | 一一・ | 第二分隊 |
| 一一・ | ―― | 一二・三〇 | 第三分隊 |
| 一二・三〇 | ―― | 二・ | 第四分隊 |
| 二・ | ―― | 三・三〇 | 第五分隊 |
| 三・三〇 | ―― | 五・ | 第六分隊 |

明日行軍間ノ警戒。

擲弾筒ハ第三小隊へ――三、第二小隊配属。

四月二十五日 晴

午前六時五十分整列、背囊は全部輜重隊にたのみ、七時半出発す。本道に出るまでが仲々の苦勞だ。ぬかるみは物凄いものである。その中段々晴れ亘り、暑さは益して来る。然し、本日の行程は約四里一寸、別に大した苦勞せずに濠州に到着す。我々の宿舎は、町より約一里前方の飛行場の、元ノチャンコロの兵舎に入る。数千名の部隊宿営して居る。

此処ではいろんな噂が旺である。これから先は、残敵多数に出て、

毎日多数の友軍がやられるとか、大した話で持ち切りである。夜ノ警戒法は下士哨による。敵の小銃弾パーン／＼聞エる。砲の音も聞える。明日は滞在である。

四月二十六日 曇

午前七時起床、どんより曇つた日で頭が痛いやうだ。皆んな自動車に乗って濠州に遊びに行く。入浴、P、酒保である。

午後、分隊員酒保に行き、みかん・みるく等買つて来る。

明日の行軍は、第一九Rの二ヶ中隊と、十二中隊も加へての大行軍である。

午後六時より、擲弾筒射撃実施、蓬生伍長ノ指示。

四月二十七日 晴

午前五時起床、出発準備をなす。七時整列、前進開始。約3km前進して背囊を駄馬に載せる。濠州の周囲をぐる／＼廻り悪道に出る。ほどなく橋梁の墜ちたる所あり。正午昼食後敵発見、十二中隊で以て撃退す。道路は嶮悪な山路ばかり。地雷の埋設多数あり。危険極りなし。

午後の行軍は、又強行軍にして、背ノはなけれども大分疲れる。加ふるに南風強く、北支はやはり北支らしく黄塵万丈、眼も口も顔もほこりだらけ、眼も開けられぬ。全く閉口する。途中、十一師団の後備大隊、我隊の第三中隊も警備して居る。久しぶりにチャンコロ(チャンコロ)の屍臭を嗅ぎ、くさい。友軍の死骸もある。気の毒な事である。

午後七時、大柳鎮と言ふ、第一中隊及I大本部のある部落に宿営

す。二丁掛の中村誠君・定和仲江君・高橋君にも会ふ。時々敗残兵が出るさうな。部落と言ふても家は二軒程しかなく、残りは全部焼き払ってあり、全く困る。全くの露営である。人間も情ないものである。

四月二十八日 晴

昨夜は寒くて眼覚め勝ちであつた。午前五時起床。本日は、第五中隊最先頭、第一小隊は尖兵となり前進す。

大柳鎮より約一里半行きし所、最も物凄き感のする山道、今までに友軍の損害数知れずと言ふ。道には無数に地雷(地雷カ)があり、友軍の自動車(自動車)が襲撃を受けて、残骸を無惨に横たへて居る。約十四台と言はれる。正午、池河駅に到着。此処は第三師団六R警備して居る。此の附近は山岳地なる故、所々に谷川あり、支那には珍しい清流がある。皆生水を飲む、顔を洗ふ、氣持よし。

宿泊の予定地たる池河駅を後にして、更に前進、午後四時、宗家舗と云ふ小部落に宿泊と決す。例により屋根一つもなし。露営である。水悪く、薪無く、全く困る。然し暖かです。

四月二十九日 晴

第三十八回天長の佳節である。異郷の空、北支の拓野(つち)に此の佳き日を迎ふ。而も我が国は、昇る朝日の如く益々隆盛であり、我又いよ／＼健康、目出度き極みである。

午前五時起床、六時輜重隊に背ノをあげ、七時半中隊は整列。遙拝式を挙行、聖寿の万歳を祝福し、八時最後尾を行軍す。暑さは益々加わり流汗りり、始めての対熱行軍である。皆フラ／＼

になつて歩く。午後五時二十分、今日の目的地総舗に到着す。此の町も皆焼野ヶ原になつて居るとは言ひ乍ら、一二三戸良い家もあり、我々は此の家に入る。大きな(周囲五、六町一里以上)溜池あり、綺麗な井戸もあり、地獄で仏のやうな氣持がする。

然し、此頃分隊内で、妙に氣まづい空氣あり。何れに味方するわけにもゆかず、班長としていやな氣がする。俺の不徳の至す所なるかも知れぬが、今までに一度もなかつたのに残念である。もつと分隊のために己人的觀念を捨て、自覚してほしいものである。暫く静観して見よう。

四月三十日 晴後雨

午前七時整列、最後の行軍である。約三里半行軍せし処、早くも鳳陽に到着せり。待望の鳳陽、皆落伍もせず無事来る事、最も祝福すべきなり。

正午、宿舎と言つても藁ぶきの悪い家に入る。水が悪く、何だか一寸塩氣があり困る。午後四時より、中隊衛兵司令を命ぜらる。疲労した後の事とて、いやだけれど致し方なし。午後六時頃より、雨降り出し困る。

午後八時、中隊長の命により非常呼集、大雨の中に約三十分巨り諸注意事項を達せらる。参謀長・旅団長・聯隊長殿の諸注意である。

いよ／＼明日より、第一線部隊として出動、徐州方面に向はんとす。今日午後、蚌埠の飛行場襲撃を受け火薬庫爆破、火災を起したと聞く。夜はねむり／＼衛兵服務。でもどうやら事故なしに終

了す。

五月一日 曇

昨夜来の雨も止み気持良し。午前九時、灰谷伍長と衛兵交代す。帰ってからゆっくり寝る。尚、本日午前九時より、チプスの予防接種を行ふ。少々痛むので困った。

午後六時、高間伍長と共に師団司令部に森班長を訪ねる。今では曹長殿でチャッカリして居る。相変らず元気で、若々しくやって居られる。いろいろの話しをし、帰りにうに一缶と羊羹・ろうそく等いたゞいて帰る。森曹長も、中隊に中隊長及大瀬准尉等を訪問される。懐しいものである。

夜、防雨外套交換に大騒ぎあり。大変だった。

夜半十二時頃、突如進軍命令来り、明午前七時、鳳陽出發する事となる。中西伍長は、内地留守第九師団勤務を命ぜられ、他の昭和十年兵の下士官と共に内地帰還を命ぜらる。

五月二日 曇

午前四時半起床、出發準備。各種の入組品(カ)のため、大した重い背囊となる。午前七時整列にて、先づ師団の作戦地たる蚌埠に向つて行軍す。背囊が重くてくやりきれない。水が切れる、休けいがない。行程約六里、皆々へトくになって午後五時蚌埠に到着す。町の入口で軍人より貰った水の味、忘れられない。ほんとにおいしかった。

蚌埠と言ふ街は、予想に反し全く近代的な奇麗な町であり、第一線近くの都会と思へぬ位、治安のよく出来た賑やかな所である。

軍人の多い事、南京以來始めての現象である。町は丁度、蘇州のやうによい町であるのに先づ一驚した。

明日午前六時を期して渡河、攻撃前進を始めんとす。それにしては余りにも呑気な風景である。午後七時夕食を終り、入浴に行き汗を流す。疲労も一度に直つてしまふ。久しぶりに卵も食べて元氣つく。

五月三日 晴

午前五時半整列、先づ軍橋に向つて行軍、第三大隊先頭に軍橋を渡河す。渡河前、大隊長の伊藤大尉の馬、湿地には入り込み大騒(カ)を演ず。

奇麗な麦畑、第五中隊は尖兵中隊、第二小隊尖兵、幸ひにして敵影なく易々として前進。背囊は重く相当苦勞せしも、午前十時頃、早くも約三里攻撃前進、本日の進出予定線蘇家子に到着。此処に於て明日の攻撃を準備、敵情・地形を搜索せんとす。此の部落は未だ土民の居た所で、鶏・牛・羊・兎等多々の有。卵を百五十程も発見、生物殺しは止めにして、今日はうどんと卵の汁を作り、久しぶりに、第一線としてのおいしい御馳走にあづかる。

午後一時半、中隊長の命により斥候となり、兵七名を引きつれ出發。第七中隊に到り連絡を取る。早くも第七中隊の斥候兵一名重傷す。山田君によく話して出かける。生來の呑気坊の事とて、さして案じもせずに出かけたるも、意想外に支那軍は多く、敵の攻撃を受くる事甚しく、危険な事此の上なし。然し、坂本・湯谷上等兵等元氣よく、よく斥候長の俺を補佐して前進せし為め、偵察

遺憾なし。葦野子より斜右一三〇〇米揚野子に至り、敵情・地形を見る。角型眼鏡を持って行き大いに助かる。右側よりの敵火最も甚しく、非常に脳まされる。

午後三時半揚野子に至る。此処にも敵多数居りし模様なりしも、早くも軍馬等放置して逃亡せしが如し。対岸の部落には、少くも約三、四百の敵屯して、旺に陣地構築中と見られる。帰途は更に側射を蒙り、暑さは暑し、汗は流れる、鉄帽は焼ける、苦しい事言ふ術なし。かくする中、葦野子直前二〇〇米位の点に来るや、突如、第七中隊我々を敵逆襲と誤認し、約二ヶ小隊を以て抵抗線に配置、一斉に射撃を始む。此れには全く驚かされる。もう皆々生きた心持なし。弾は前後より集中を浴び、一生懸命に手を挙げ、ハンカチを振り、友軍たる事を報せるも、悲しいかな、日の丸旗がない。もう絶対絶命、俺はもう死を覚悟で立ち上り、銃とハンカチを振り報せる。やつと彼等も気がつき射撃中止す。午後四時半帰隊した頃は、フラ／＼になってしまった。然し、無事で皆帰られて何よりであった。中隊長殿も、心配して居られただけに非常に喜ばれた。

五月四日 晴

午前六時出発。昨日の道土堤上を前進して、第七中隊の居りし所に進出、暫く大隊の子備隊となる。午後一時頃より、第一隊たる第八中隊の渡河援護のため、材料運搬をなし、其のまゝ我々は、部落より河岸に至る交通壕を掘りに出る。彼我の狙撃兵の射撃物凄。此の作業に於て、北山・河端^(川)最もよく活躍せり。

(欄外)「斎ト・北山・小林・長谷川・高間」

午後四時半作業終了、直ちに渡河準備。第八、第五、第六中隊の順序。工兵隊は素裸となり、渡河のはしご両肩に^(ツ)待期。午後四時三十五分渡河開始、煙幕構成一斉に突撃を開始。第八中隊を以て向岸の第一線陣地を占領、第五中隊はそれより右第一線として斜左の部落に向って攻撃前進、俺は先頭に立ち前進。午後五時頃、真先に立って突撃せり。此の際、敵兵一名逃げ遅れ居るを発見、一刺突の下に此れを殲し、部落の北端に進出、敗残の敵を^(ツ)徹底的に射撃す。此の部落占領、第一小隊第一位、第三分隊中隊の最先頭なり。

本戦闘に於て、松田隆男上等兵・乙部金蔵負傷す。他は無事なり。幸なりと言ふべし。夜背囊を取りに行く。今日の渡河は、水首切りまで来て、皆づぶ濡れになる。

夜半午前二時十分頃、優勢なる敵逆襲し来り、危険極りなし。

五月五日 晴

午前五時半出発、朝食もとらず急追撃に移る。まるで秋季演習のやうな攻撃前進ぶり。敵はドン／＼逃げ出し、余り追撃に懸命で、背囊が重くてやりきれない。午前九時過ぎ頃、第五中隊は右第一線たるため、残敵多数右にあり。突如、約四、五百の敵と遭遇す。前進不可能にて困却す。敵弾はドン／＼来り、而も弾着よく危険極りなし。敵前作業をなし、漸く敵弾を避ける。日本部よりは早く来いと伝令が来る。然し^(ツ)。

三 覚書

*大場街濮家宅午後五時到着。(鉛筆ヲ書カレテイル)

* (写真9)

*4 石田善男

酒井与一 ○

牧野昌直 ○ 張鏗江

2 酒井俊一 四時三十分

小川久次郎 ○

(「」内万年筆、他は鉛筆)

*三月十九日落伍者

牧野昌直 酒井与一 小川久次郎

三月二十日

全右、但シ午前十一時頃到着。(以上万年筆)

* (写真10)

*一、上司へ大隊長ノ注意事項。

二、諸規定ノ励行。

三、実行ノ監督。

四、軍規・風紀ノ維持。

五 一、報告ハ午前七時筆記報告。

中隊兵舎内外衛兵所並歩哨後。(以上万年筆)

*一、銃架ノ事。 二、標札ノ事。

三、服装ノ厳正。 四、□舎折不用。

五、食事運搬ノ事。(以上鉛筆)

*司令 山本伍長

①和田恒美 平瀬芳成 佐藤 寛

東光琢宗 朝日兵松 朝日 衛

今西幸吉

*レ山本 四 高間 四

土本 □ ○ 北山 三

小林 二 ○ 長谷川 三 ○

レ齋ト 四 ○ 川端 四 ○

レ広瀬 三 ○

レ東 四 ○

*功績残留人員中梱包□□兵 勝元孫市

自動車ニテ行くモノハ、十一日午前八時青浦発上海行キ。

杉本准尉

其ノ他十七日前一〇・〇〇本部ト共ニ青浦発。(以上万年筆)

(ココニ「日常支那語」へ四頁アリ、省略)

* (欄外)「第一小隊第三分隊」

分隊長 歩兵伍長 山本 武

コ上、 土本 蔀 ヨ上、 小林末男

ヨ一、 齋藤秀雄 ヨ一、 北山重次郎

ヨ一、 高間貞一 コ一、 東 作栄

現一、川端 守 ヨ一、平瀬芳成

補一、長谷川海陸

* ○福井県丹生郡吉川村平井四七ノ二

父山本總左エ門 山本 武 (十脱カ) △二六才

歩三六 中五 番一四一

○名古屋氏東区山田西町一丁目ノ五七

妻父土本六松 土本 節 △三十二才

歩三六 補 番一〇〇〇

○福井県丹生郡越廼村蒲生二二ノ六

父小林末吉 小林末男 △三十八才

* 歩三六 補 (番脱カ) 七九九

○金沢氏醒ヶ井町三〇

父東易太郎 東 作栄 △三十九才

歩三六 補 番一六九七

○大野町四番下区

妻和歌みさを 平瀬芳成 △二十八才

歩三六 中五 番九八

○福井市松ヶ枝中町二七

* 母北山きゑ 北山重次郎 △二十五才

歩三六 中五 番一一

○福井県坂井郡大石村大牧

妻高間たけを 高間貞一 △二十八才

歩三六 中五 番三一

○尼ヶ崎市大物町三丁目四一九

母斎藤はつ 斎藤秀雄 △二十六才

歩三六 中五 番八八

* ○福井県今立郡上池田村清水谷

父長谷川久治 長谷川海陸 △二十三才

歩三六 補 (番脱カ) 二五〇九

○福井県坂井郡高椋村長崎高瀬

父川端勘平 川端 守 △二十三才

歩三六 歩砲小二 番二四

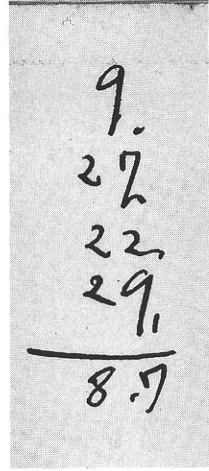
* 五月四日 射耗弾 小 一七五 擲 二

(以上万年筆デ書カレテイル)

* (裏表紙扉)

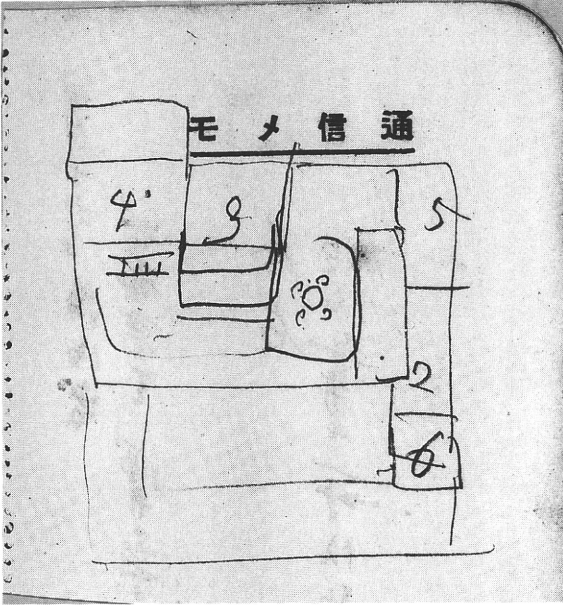
(写真11)

(写真9)



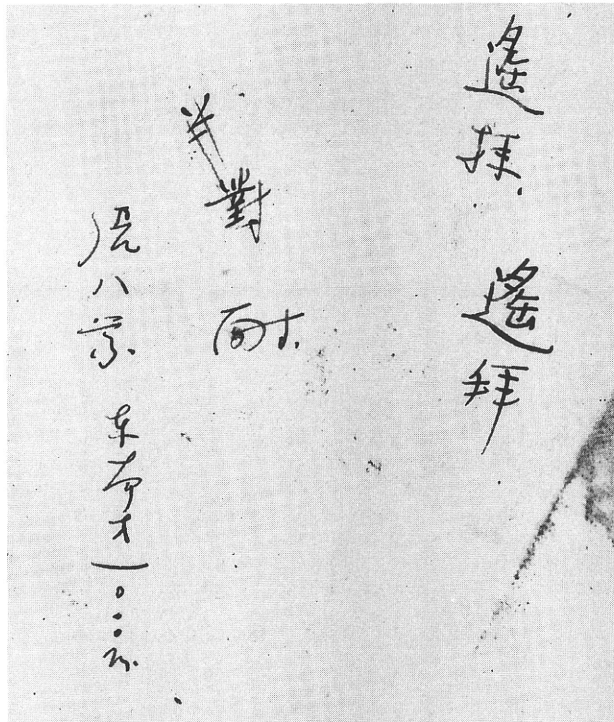
(万年筆)

(写真10)



(鉛筆、左端ハミシンノ穴)

(写真11)



(万年筆)

第四冊

一 解題

形態…昭和十二年の安田銀行の手帳。本文四八枚。月(英語)、日、曜日(英語)が印刷されているが、それを訂正して使用。タテ二・五×六・五cm。左開き、横書。日記本文はすべて万年筆で書かれている。なお、銀行の営業関係の印刷部分はすべて省略した。

表紙…安田銀行のもので特記事項はない。

内容…五月六日からの徐州会戦の続き。十九日徐州が落ちた後、反転して南京に帰り、トヤ橋警備に当たった八月九日まで。初めの激戦と、五月下旬以降の平穩無事が好対照をなしている。火野葦平「麦と兵隊」は、五月四日から二十二日までの徐州会戦従軍記だが、中国敗残兵の斬首を見て「私は眼を反した。私は悪魔になつては居なかつた。私はそれを知り、深く安堵した」などという作家の文章よりも、五月十六日や二十日の記事の方が余程リアルに思われた。そしていづれも「中隊長命令」すなわち上官の命令によって実行されていることにも留意しておきたい。なお余談ながら、「麦と兵隊」には、吉住部隊や脇坂部隊のことが出ており、武も『従軍記録』で葦平について一言だけ触れている(一三九頁)。

なお、覚書の書き方はその都度記すことにする。

二 日記

五月六日

雨の中に寒さにふるへ乍ら夜を送る。雷鳴激しく非常な雨、困るくくで天幕の下で心細し。

午前三時半出発、第一線参加のため、雨のためドロドロになった川のやうな道を、重い背ノを気にし乍ら、ヨロメク足をフラフラと前進、真の闇夜である。約千五百米行く頃、19 i と会ふ。敵弾漸く激しくなる。

午前五時半凹地に集結。背ノを此処に置いて、飯盒のみを背負ヒ袋にす。敵弾物凄く、団野上等兵、頭部貫通にて生命危篤となる。第一、第二小隊は第一線となり、クリークの中に這入る。敵弾低いため、太股まで水のあるクリークの中に座り込み、期(マツ)の至るを待つ。敵は約一ヶ聯隊と言はれ、我軍は19 i の二ヶ大隊、36 i の第二大隊。我等の目標張八営は、見■るにも見られぬ位弾が激し。此の部落は敵の主陣地にして、道路に■副ふ大部落。無数の掩蓋銃座を利用し、死物狂ひの抵抗を続ける。

午前八時半、砲兵の集中射撃開始される。19 i 先づ先頭に突撃を開始、続いて五中隊突入すべく態勢を整へたるに、19 の兵供(マツ)に突撃発起せんとする。敵前一〇〇m位まで前進せる時、敵は俄然逆襲に転じ、猛烈に射撃し来る。19 は志気鈍り後退してしまった。第一回の突撃は失敗す。

雨は依然降り止まず、飛行機は来てくれず、寒さは加わり心細し。

俺は海道小隊長と共に、くどき乍ら話して居る時、飛び来った一弾は、俺の丁度前の前田憲治の大腿部に命中す。第二小隊では細川伍長戦死、第三小隊では芳野伍長戦死と聞く。あゝ又孟家宅の二の舞か、総べてが孟家宅攻撃の時と似て居る。敵は何ら衰へる事なく心細し。

静かに瞑目して故郷を思ひ出し、雄き決心を定める。雨益々激しくなる頃、第二回突撃の命令来り、我等は先づ敵弾を冒して約二〇〇m前進、戦車壕の中に入る。時に二時十分。二時半突撃と言ふ。時が来ても集中射撃始まらない。朝から飯を充分食べて居ないので、腹が空ってきた。

午後三時半、山砲・歩兵砲・MGの援護射撃始まる。19 iの者は前進を開始す。而るに何事ぞ、19 iの者共、今一步の所まで前進しながら、やはり突撃を敢行しようとする。19の大隊長は率先第一線来り、部下を叱り太激励すると共に、我々に早く出て援助してくれと言はれる。清水中隊長は、決然第五中隊突撃に進め」と大音声に呼び、一番先頭に立ちて飛び出す。続いて海道少尉、五十米前よりは伊藤小隊、勇敢なる五中隊の兵士は、我先にと敵陣めがけて突撃を敢行す。

中隊長は足が早い。中隊長を殺すな」と叫びつゝ、俺は競争で前進す。約一〇〇m行きし所、東光居り、加藤清君負傷せりと聞く。ハツと驚きしも「よし判った」とのみ。後髪を引かるゝ思ひ。せめて仮ホータイ位してやりたいのは山々なれども、俺には今、うらみ深き張八營の敵を突き殺し、彼の討敵をせねばならぬ重

大責任がある。西島上等兵等が手当をして居る。「頼む」と一言、再び前進、左第一線第二小隊19 iに先駆けてワツと飛び込んで行く。後れじと息切れするのを、齒を喰いしばって戦車壕に飛び入り、クリークに飛び込み、銃眼に向つて敢然飛んで入る。敵は驚いて、手榴弾を投げつゝサツと逃げ出した。それ逃がすなど、もう分隊も中隊も大隊もRも区別はなく、日本軍一体となり、協力して追ひ討つ。

然し残念乍ら、友軍は三ヶ大隊も攻撃しながら、突撃し来った者僅かに三〇名位。此れだけで以て、此の大部落を支へるとは仲々である。俄然敵は、クリーク沿ひに逆襲し来る。手榴弾を投げ、小銃弾を射ち、而も此の部落目がけて四方八方より弾が来る。やつと突入し、部落を占領しながらバタ／＼殲れて行く。此の時土本上等兵と会ふ。「海道少尉戦死！」と聞く。余りの事に沈黙をしてしまふ。然し今はそんな時に非ず、自ら小隊長代理となり、率先逆襲部隊に対し、19の兵と協力して之を攻撃す。

家屋内よりやるべく、土本上等兵及第一分隊の稲木上等兵以下三名、島上等兵等と決然此れに向ふ。俺は家屋内より銃眼をつくり、射撃すべく準備を命じたるに、土本上等兵は相変らずの剛胆者として、土塁の中より出てポン／＼敵を狙撃、二、三名を殲せし折、死物狂ひに射つた敵弾は土本の頭部に命中、「山本班長殿やられましたあ」と悲痛な叫び。驚いてかけより見れば、「大丈夫です／＼」と言つて、「早く止血を」「よし判った、しつかりせよ」と、俺のホータイを出し充分手当す。傷は頬より耳に貫通にて大した

事なし。不幸中の幸ひと言ふべし。もう少しで戦死である。然し、これがため大逆襲部隊を撃退し、本部落完全占領し得るの因をなすものなり。

かくする中、敵は全く退却。中隊は集結となり、後続部隊はぞく／＼来る。中隊長健在。『山本御苦労だった』『海道少尉を亡くしてよわ■った』と言はれて、涙ぐんで居られる。

大隊長が来る。『第五中隊御苦労だった、よくやってくれた』と言つて、我々を拜んでくれる。あゝ、海道小隊長が生きて居てくれたらな。土本が負傷し、清君が負傷し、東作栄君も大腿部膝蓋部貫通と聞く。残念である。伊藤少尉重傷、馳川一次君重傷、陣地もさりながら、犠牲も大したものであった。直ちに宿舎に入り死骸収容、戦傷者収容をなし、背ノを取りに行く。

変り果てた小隊長殿、涙が出てしようがない。東君も大分の重傷、清君も眼がぼんやりとして居ると言つてフラ／＼である。直ればよいが……。土本のみ元気がよい。今晚は僅かに六名である。川端も居ないし、ほんとに淋しいのだらうか。目的の張八營を占領したのに、どうして此んなに淋しいのだらうか。

あゝ、戦場の常とは言ひ乍ら、気の毒な事である。それにしても俺は、未だに命のあるのは何とした幸な事だらう。妙法を忘れず、散るべき時までにはしっかり身命捨て、頑張らう。

五月七日

午前七時出発との事に、早くより起き出でる。海道小隊長の遺骨を拾つて、それより土本君・東君・清君・伊藤少尉・馳川君等に

会ひに行き、別れる。昨日より小隊長代理を命ぜられ、益々責任重大である。我々が此の張八營を占領せし為め、旅団・師団の進出は円滑となり、続々と後方部隊が来る。八時出発、旅団直カツとして最後尾を前進す。

正午、米・酒・たばこ等支給せられ、更に果しなき^(マ)拉野を前進。天気はうら／＼に晴れて気持良く、遠くでドーン／＼大砲や爆撃をやつて居るのが聞える。夕方師団の直カツ隊となり、司令部行動を共にす。午後七時半部落に到着。各小隊より下士哨一組宛出し警戒す。卵を三十ヶ程発見、豚汁をなし夕食す。

河端の兄さんに会ふ。

五月八日

午前七時半整列出発す。正午約三里前進せし時、敵と不意に遭遇す。もう少しで、司令師団司令部危険に陥入る処であった。此処に於て聯隊右第一線となり、右より迂回し敵を攻撃。敵は相当頑強に抵抗し居りしに、背後に迫られて一挙に退却。第一大隊正面に於ては数百名を殲せしと聞く。

麦畑の中を約三里半追撃、午後八時頃大張巷子に到着、宿営す。

五月九日

午前六時出発準備完了せしに、正午頃まで^(マ)待期。第一大隊・歩兵第二大隊は、前衛本隊となり追撃、約四六里前進、宿営す。今日は、戦車・自動車等多数来る。敵は西方及北方に向け敗走せるが如し。敵影見ず、銃声聞えず。鶏・豚等沢山あり、葱もあり、御馳走が出来る。

思へば今日は福井の神明祭の日、去年は楽しかったに……………。

五月十日

出発を予期して居たのに、出発命令来らず、滞在の噂あり。7:15 i ドン／＼前進す。軍衣袴・襦袢・袴下など洗濯す。兵器の手入れをなす。顔もそる。命かへった様である。矢納伍長等戦場掃除に行く。風強く吹きつける。肉■汁にあき／＼する。糧秣支給せらる。

今日中隊長殿のお話によれば、13Dは昨日蒙城を占領、敵約三〇〇名逆襲し来るも、飛行機を以て此れを撃退すとの事也。師団は一部を以て西北方に退却の敵を急追中、Rは此の附近に集結して午後の戦鬪を準備、敵は後方に廻る形成あるにつき、よく／＼注意すべし、との事なり。

午後四時より、中隊長殿より分隊長以上に情況説明あり。帰ってから小隊員に、対戦車戦鬪、特殊発煙筒等につき学科し、防毒面の検査をす。

五月十一日

本日も休日、師団は此の附近に集結して次期の作戦中である。今度の作戦は、極めて思ひ切ったやり方にして、四方八方敵中に深く入り込み、徐州方向に向って迂廻、敵を■包围の態勢を取るのて、一つ異へば数十万の敵に後方を襲はれ、或は横からやられるかも知れぬ情勢である。昨夜第三大隊夜襲を受け、終夜戦鬪しあつた模様なり。今日、第九中隊の山田語君・加藤捨君等に会ふ。12中隊の峰金君、昨夜の戦鬪に軽傷せりと聞く。

五月十二日

午前三時半起床、四時半出発行動を開始す。第一小隊は小行李の最後尾を行軍す。大隊は師団と行動を共にす。各種兵科が一度に細い道に來り、大変な混雑である。暑さも今までにない暑さ、足の裏も焼けて大困り、足が痛い。

とう／＼午後五時半まで歩きつゝ、更に宿舎に向はんとすれば敵と遭遇、前線の兵多数傷つく。我々は再び元の位置まで帰る。すっかり宿舎に着ち落いたのは、午後十二時頃であつた。

五月十三日

午前九時頃より前進開始、師団本隊として司令部の後方を続行す。昨夜の敵はすっかり逃げ亡せて敵影見づ。暑さ酷しく休みはなし、皆コボし乍ら行軍す。落伍者も相当あり、昼食時より午後三時半頃まで休み。それより更に前進、午後七時半頃問題の澮河を渡河、敵もなく無事師団は集結す。但し、R正面は相当銃砲声聞ゆ。午後十二時まで大休止、それから中隊は師団の直接警戒となり、司令部の前を前進。

五月十四日

師団通信との連絡に任ず。月は明るく照り、涼しくて、夜行軍の方気持良し。午前八時百善西方無名部落に到着、直接警戒をなしつゝ大休止をなす。間食を作り食す。午後七時再び行動開始、夜行軍を以て前進、連日連夜の夜行軍に皆へト／＼である。本日は道路づたひに前進／＼、足が痛い。豆が出来る。今までに足を痛めた事等一度もなかったのに、今度は道が焼けて居る上に、余り

に連日の行軍のため、足の如何に丈夫な者もすつかり^(一)

五月十五日

参ってしまった。

午前二時頃灘溪口に到着す。城壁も相当立派な鳳陽位もある様な街である。疲労のため夜明けまで休む。午前七時起床、聯隊復帰を命ぜられて宿舎を移動す。

此の街には丁度南京へ行った時のやうに、砂糖・支那酒・豚・鶏等沢山あり、さつまいものテンプラを一ぱい作って食べる。とてもおいしかった。今日珍しくも昔鯖浦に居た鈴木君に会ふ。

午後十二時半頃より行動開始、再び師団の直接警戒部隊として行軍、第一小隊は前衛との連絡を命ぜらる。今日の暑さは又格別にて、C.30以上はあると思はれる位暑い。水を飲んだく。皆々水には気がひである。

行程約四里、へとく〜に疲れて、孫圩と言ふ城壁のある一寸した町に入城、宿営、大休止をなす。今日は相当の落伍者あり、一小隊はまだ余程成績良好の方である。三小隊等、僅かに八名しか来て居ないと言ふ調子である。

午後八時に至るも北山重次郎来らず、心配す。

五月十六日

十数名の落伍者あるまゝ、中隊は午前二時半出発準備完了。相変らず師団直接警戒の任務の下に、徐州に進撃を開始す。一寸孫圩を出た所、敵は左側背に迫り、夜襲し来り、猛烈に射撃し来る。

師団司令部等乗馬者は、驚き慌て、逃げ出し大混乱に陥るも、漸

く危機を脱し加子口に至る。

風強く、連日の炎天にすつかり干き切つて、黄塵万丈、眼も口も鼻も開けられぬ位也。四方は山ばかり、相当敵中に入り込み、附近の山々よりは旺に銃砲声聞え出す。

午後六時頃河淮と言ふ部落に到着す。雨降り出す。附近の住民等皆捕へ来り、中隊長命令により全部刺殺す。十八才位の可愛い美少年あり。不憐なれ共中隊長殿が殺せとの事、補充兵共誰も殺す者無く、仕方なく俺の銃剣によって成仏させてやる。今晚は此処に宿泊と決す。鶏・豚等にて御馳走す。

蕭果は明日あたり陥落すとの事なり。然、後方孫圩附近は相変らず包囲されて、後方部隊は全滅せんとして居るとの事なり。救援部隊征くも駄目らしい。午後七時頃北山も来る。第一小隊は全部揃つたり。夜間は直接警戒部隊として、下士哨を配置し服務す。

五月十七日

午前十一時出発準備なりしに取止めとなり、司令部の附近に於て警戒す。徴発を行ひ、芋等取り来り、テンプラ・なんきん豆等にて腹をふくらかす。後方はいよく〜続かず、糧秣は此後十数日補給見込つかずとの事、心細し。

指揮班の湯谷・岡村等未だ来らず。或は孫圩附近にてやられたのかも知れない。天幕露営をなし警戒す。第二大隊正面銃声激し。蕭果は今朝占領せり。第一小隊は、今晚は予備隊として天幕露営をなす。

五月十八日

朝っぱらから大暴れ、風・ほこりがひどい。展望哨を配置して警戒す。正午頃原隊復帰の命あり、慌たゞしく出発準備を整へる。午後二時頃より第一線に出発す。途中、R本の位置にて弘君に会ふ。夕食の準備をなし、張二庄に向ふ。張二庄西方五百米の村に背囊を下し、背負ひ袋を作つて、第二大隊苦戦中と言ふ張二庄二向ふ。

村を出るや否や、弾が来るく、大したものだ。第一分隊の古川負傷す。早駆け前進にて辛じて張二庄南端に取りつく。此の時の情勢にては、此の部落は一昨日来の戦鬪にて、第七中隊を以て漸く部落の一角を占領せるも、敵は死物狂ひの抵抗にて容易に退却せず、部落内に於て手榴弾を投げ合ひ、肉弾戦をやつて居るので、第七中隊は多数の戦死傷あり、苦戦中なり。

第五中隊は、大隊の子備隊となり待期す。沢山の我々が持つて来たたいまつにより、部落に火を放ち、炎々と燃え続けて居る。午後七時半頃、漸く我忠勇なる兵士の肉弾により、部落全部を占領す。我々は此部落を確保す。焼け跡には、特殊発煙筒により窒息、焼け死んだ者も沢山ある。此の戦斗は全く物凄い戦ひであつた。冬島の山田君等如何したやら、聞いて見るが判らず、多分又負傷したのかも知れぬ。

五月十九日

午前八時頃出発、大庄を第一、第二小隊にて攻撃せるも敵なし。此の部落の陣地は物凄いもの、敵なくして幸であつた。大庄より小張庄に到る。此処にて敵情・地形を偵察、攻撃を準備す。俺は

兵一一名を連れ、左部隊との連絡をなす。

午後六時第五中隊は、左第一線となり、毛場攻撃を開始す。最初は敵ありしに全部逃げ失せ、易々たるもの。夜半前の河を渡河、山の下に到る。夜を撤す。

五月二十日

午前八時頃僅か三時間の睡眠にて出発、山を越えて東方に向ふ。途中部落に火を放ち、敵の拠点となるを防ぐ。更に中隊長命により、良民と言へとも、女も子供も片端から突き殺す。惨酷の極みなり。一度に五十人、六十人、可愛い娘、無邪気な子供、泣き叫び手を合せる。此んなに無惨なやり方は生れて始めてだ。あゝ戦争はいやだ。支那兵ならいざ知らず、罪ない婦女子を殺す、全く見るに忍びず。此んな事をやり乍ら約六里前進、午後五時頃津浦線に出る。

楡所(庄)に至り次の戦を準備す。田中伍長以下八名の斥候、敗残兵を捕へ来る。此れこそはうんと徹底的にやっけるべきと、むしろ惨酷すぎる程な殺し方をしてやる。川去の牧野君も来て、火を付けて苦しめてやる。胸がすくやうだ。

晩寝ようとする頃出発準備、師団司令部の警戒のため再び逆戻り、とうとう夜明けの午前四時まで歩き続けて、疲れ切つて休む。

五月二十一日

午前九時頃まで寝て居た時、出発準備にて西南方元来た道の方に向つて出発。ほこりと暑さに情況も判らず、トントコく歩いてく、夜になるも歩き止まず、ほこりと寝不足それに疲労、皆腹

を立て、然し止るわけにも行かず、とうとう午後十時まで一挙に二時間以上休みなしに歩かされて、着いた所が家少くて露営との事。むかついてしまふ。

雨さえ少し落ち始め、つくつく行軍がいやになった。午後十二時過ぎ寝につく。

五月廿二日

朝起床するも出発の徴なし。故に今までの寝不足の分までもと、十一時頃まで寝て居る中、非常配備につけとの大隊長の大声に、びっくり飛び起るも何ら変りなし。何でも残敵が東方山の裾を逃げ居るとの情報によるとか……………。

第五中隊は、約二〇〇〇米前進の命を受け出発。第一小隊は、更に一〇〇〇米前進、謝台子に至る。此の部落民はよく帰順し、我々が行くと早速お茶の接待、たばこ・卵等いろいろの間食を持って来てくれる。手には日の丸の旗を立て、居る。表面のみかは知らぬが気持の良いものだ。たばこの欠乏に苦しんで居た我々は大喜び、特に甘い目に会ったわけである。晩のおかずも、□前なものばかりであった。

尚、山上下等兵以下四名、宗台子の敵の拠点となるを畏れて、放火を命じて焼きまくる。午後七時、命により多大の収穫を得て帰隊す。

河端兄さんと話し合ふ。

五月廿三日

本日も張庄に於て休養す。久しぶりに支那米分隊当配される。此

れでやっと命つながった様な気がする。然し、余りの不味さにあきれてしまった。

明日より田中伍長以下五名、孫圩附近の戦場掃除に出發する筈。夜半、案じてばかり居た湯谷上卜兵無事帰隊す。幸なり。

五月廿四日

午前四時起床、五時二十分整列、徐州攻撃の任務を終えて蚌埠に向つての行軍を開始す。海道少尉以下多数の尊き犠牲者に哀悼の意を表す。朝早くて涼しく、ほこりが一寸気にかゝるも、背囊は馬に積んであるし、体はとても楽である。張庄より約五里前進せし所に、一つの山のふもとの鉱山町あり。此処にて大休止となる。煙草等沢山あり、又胡瓜・豆・葱等珍しい野菜物もある。飯はチャン米にて不味くとも、お菜はともおいしかった。

四時まで大休止、午後七時頃目的地に入る。敵弾の音聞ゆ。急に大隊本部方面にて警戒につき、やかましくなり、第二小隊よりは山の頂上に下士哨一組、第一小隊よりは川の土壘附近に下士哨一組、山上下等兵以下五名服務せしむ。

小隊の兵共、皆々腹具合悪しとの事にて、第三分隊にてももう肉は止めにして、精進料理にて夕食す。

五月廿五日

第五中隊は尖兵中隊となり、第二小隊は尖兵となり前進、所々橋梁落ちて居り苦勞す。今日もやはり大休止四時間余。今度の行軍はほんとに樂である。朝、チシャ菜が沢山あった為、此れでお昼にお浸物せし処、うまい、内地へ帰った様な気分さえず。宿

當は予定より一寸遅くなりしも、午後八時頃入る。

五月廿六日 後雨

午前四時半起床、五時五十分出發にて、中隊は大隊の最後尾を前進す。南手集にて大休止との事なりしに大休止せず。此の町は19iが激戦せし所にして、滄河附近より一帯に亘り堅固な陣地の跡があり、友軍の苦戦の跡がしのばれる。麦畑は敵の死骸にて悪臭ぶん／＼たるもの。正午になつても休まず、どん／＼前進／＼、遂に午後一時目的の宿营地に入り、昼食となる。

湯谷上等兵沢山の胡瓜を取つて来てくれる。それを漬物にしておく。昼寝をらく／＼とす。物資は少くおかつはないが、午後のひるね、楽なり。

五月廿七日

海軍記念日の佳き日である。昨夜来の大雨は、遂に道も畑も水浸り、歩行困難なる故午前中休み。

午前十一時出發す。天候は回復すれども水引かず、靴に泥がつき、水は道路一ぱいにあり、馬も人も困る／＼。軍服もなにもかも泥まみれ。然も水のため廻り道をしては、一里の道を二里にも三里にもして歩くため、とう／＼午後九時まで歩き続け、へ／＼／＼になつて到着。それから服や巻脚絆を干かず、洗濯する、飯を炊く、多忙を極める。胡瓜の漬物をして食し、午後十一時半休み。

五月廿八日

午前七時出發。第五中隊尖兵中隊として、かすかに見え始めた蚌埠の山を目標に前進す。正午頃、張八營にて見た二重実線路に出

づ。昨日のあの水浸りの道もすっかり乾き、行軍にはもつてこいの日和、風あり、気持良し。約一里予定より前進し、午後五時頃宿舎に入る。

今日も、湯谷上等兵、沢山の胡瓜を採つて来てくれたので、なます・すお汁、それに約四十本程は漬物となす。明日は蚌埠到着との事。飯もおいしい、日本米又うまい。

五月廿九日

本日蚌埠到着との事。然し、道巨（つづ）は約八里位あるとの事、皆元氣を出して歩く。午前六時五十分出發。風涼しく、一時間後には思ひ出さま／＼の張八營に到る。未だ当時の激戦の跡そのまゝ、支那兵の死骸も殆んど腐敗したのも、ゴロ／＼ころがつて居る。あの当時焼けて居なかつたのに、後方部隊が火をつけたのであらう、すっかり灰燼に帰して見るかげもない。

然し、我々があ晩泊つた家はあつた。少し進むと、土本上等兵の負傷した場所そのまゝ、清君等負傷兵が収容されて居た室もそのまゝ残つて居る。敵の逆襲を受けて心から困つたあの凹地には、海道少尉・細川伍長・吉野伍長等のお墓が並んで立てゝあり、鉄かぶとがあるのも何となく哀しい気持だ。張八營の陣地を見て、始め今更ながら掩蓋の多いのと、陣地の堅固さに驚かされた。

今日の行軍は順調に進み、正午前、早くも渡河戦をやつた附近に到着す。それより予定コースを変更し、梅橋に向ふ。五月三日斥候に出て苦労した部落も見える。懐かしいものだ。附近の住民は、麦刈りに、皇軍の接待にと湯茶運搬に多忙である。大休止四時間、

午後四時出發、蚌埠一里手前の村に宿營す。

五月三十日

午前五時五十分整列にて蚌埠に向ふ。約一里にて淮河の軍橋、徐州攻略の第一歩を踏み出したる此の軍橋！今再び淮河に姿を写して、楽しい渡橋を行ひ得しもの、果して当時の幾割ぞ。思ひ半に過ぐるものあり。

午前九時無事蚌埠の宿舎に入り、先づ何よりもと、パイ缶・ミカン缶、ビール・サイダーに腹をふくらす。高間伍長迎へに来て居り、川口伍長も又病氣なほり原隊復帰して居る。其の他大滝・森下・鍛冶・細川等多数入院者も帰隊して居る。現金なものだ。正午頃、一恵君ひよっこり面会に来て下さる。思ひがけない事だけに余計嬉しく思ふ。バット一箱頂戴す。

昨日、今日の暑さ、全くやりきれない。それに蠅群が大したものだ。午後五時頃山本正君面会、多くの慰問品いたゞく。河端の兄さんも訪ねて来て、故郷に帰った様な賑やかさであった。入浴にも行き、夜は夕涼みに出て、午後十二時頃まで休む。

あゝ待望の蚌埠よ、楽しき夢まどらかなれ。

五月卅一日

本日は蚌埠にて一日休む。汽車が無いためだらう、此処蚌埠の軍人の多い事、無慮十万と言はれる。軍用自動車・戦車・軍馬・野重・歩兵部隊等々と大したもの。町の中は全く、人・馬・車でゴツタ返して居る。支那人も多い。ほこりも多い。

今日故郷へ便りをす。思へば一ヶ月半ぶりの手紙である。どんな

に待つて居る事か、案じて居る事か。今では丁度田植えの真最中である。多忙な中に戦地の事を思はぬ日とてはないであらう。恋しい夫の身の上を案じて居る、やさしいはるゑの傍、目に見える様だ。

六月一日

早や六月の月になってしまった。朝六時五十分整列、先づ蚌埠の駅に向ふ。我々が此処へ来る折通つた道である。駅にて休み、午前九時乗車開始。無蓋貨物車二輛に一ヶ中隊すし詰めである。前十時頃発車、浦口に向ふ。四方の景色は行く時とは大変り、良民はせつせと麦の刈り取りに精出し、田植えにいそしんで居る。貨車にふす^(マ)られる事八時間、午後四時半浦口停車場に到着す。此

処にしばらく休けい。六時半頃より連絡船に乗り、南京下関に到る。いよ／＼揚子江を渡り、北支より江南に來たのである。下関兵站宿舎に泊る。

南京も良くなり、全く見違える様だ。カフェイスターとかりりし、弥生食堂、●●食堂と、軒を並べて立ち、奇麗な支那クニヤン・日本娘等が一ぱいだ。時計修理店も多い。酒保、軍の慰安所、市場等々。電灯は明々とき、繁華な巷である。腹が空いたので高間伍長と二人で、食堂へどんぶりを食べに行く。余りお客が多いので、サービスガールも二十人位は居るのに、暇がかかる事おびたゝしい。一鉢五十銭、然し■うまかつた。

六月二日

午前中休み。時計を直す。半歳ぶりに時計を持って見る。散髪も

なす。入浴も一人行き、良い気持になってから正午出発。下関駅に到り、午後二時三十分発列車にて常州に向ふ。汽車は例により貨物である。江南の窓外の風景を賞でつゝ約六時間、かるく常州駅に到着す。

昨年十一月廿九日常州に入場した頃は、未だ敵の逃げた頃にて、火災は炎々と燃えつゝあり、足の踏み場もない状況であった。其の夜酒屋の中へ宿泊した時は、酒・米・醬油・あめ・豚肉・砂糖・梨・ざくろ等々あらゆる物資があり、すき焼き・ぜんざい・ぼた餅、おいしかったものだ。

あゝ統^(マ)べては夢の中の思ひ出か。今来て見る常州、それは平和そのものゝ姿である。兵站宿舎に入り泊る。

六月三日

昨夜一寸寝冷えをしたのか、今日は胃腸が悪い。午前中宿舎の中で遊んで居る。第八中隊は本手鎮を引上げて、常州に帰って来た。午後三時過ぎ出発命令来り、我々は兵站部の自動車に乗り、新任地ト弋郷^(德)に向ふ。ほこりを被り乍ら約一時間以上走って、午後五時頃無事ト弋郷に到着す。此処は、我々が南京に向ふ途中、昼食を食べた所であった。中隊長以下宿舎を見て歩き、今晚は仮宿営をす。地方有志出迎へてくれる。

六月四日

午前十一時頃中隊宿舎決定す。第一中隊は一ヶ小隊のみ一〇室、第二、第三小隊は別に一ヶ所へ、早速宿舎の準備に取かゝる。夜までにどうやら宿舎らしくなり、始めてのびくと警備気分にな

る。実に満一ヶ月半ぶりである。

六月五日

炊事・便所、其の他いろ／＼と設備をなす。正午には地方有志の招待あり、支那料理の御馳走、おいしかった。此の附近は相当治安回復し、平和な村である。

午後梅田軍曹帰隊す。原隊復帰者の顔もぼつ／＼見える。戦争が済むと段々人が増えるものである。今日中隊長殿と二人で、海道少尉の遺留品の整理をなす。今更乍ら涙の種であった。気の毒である。此の間から、はるゑより五、六本も手紙来る。うれしい。

六月六日

正午頃残置兵達皆帰って来る。土田・勝本等功績係も帰隊す。段々賑やかになって来た。午後小隊長二名補充されて来る。我等の小隊長は青山少尉、第二小隊長は高木少尉である。二人共何かしら異国に来て、一寸びっくりした様である。戦場に於て果してやってくれるかしら、一寸心配な様である。然し、此れで俺も小隊長^(マ)を止め、楽になった。

此頃胃腸の悪いのが、どうしても余り良くなならない、困ったものだ。尚、正菜君戦死の噂、心配で心配でたまらない。初年兵十六名来る。

六月七日 雨

気分悪いため午前中休む。然し、功績室など見るため少し歩く。もう衛兵も炊事も総べてが出来て、兵舎らしくなる。唯不便なため、毎日の日本本部への連絡等が大変である。

俺はもうどうでも良い。はるゑからのラブレターでも見て居れば、気もはれ／＼するんだから。

午後土本上等兵原隊復帰して来た。待って居たゞけに余計うれしい。北山重が一昨日入院してかへってうれしい位。少し班内の人員も移動させねばどうも困る。

六月八日

腹具合どうもはつきりせず、相変らすおかゆを食べて居る。本日を以て大概宿舎内外の設備を終り、楽になる。

午後は高間伍長と二人休養す。夜間十一時頃、就寝の頃より漸次腹痛み出し、又も劉河鎮の時のやうに痛くて仕様がな。夜中遂に一睡もせず苦しむ。高間伍長等の看護を受くるも直らず困る。

六月九日

昨夜来の腹痛止まず。仕方無く又担架に乗って、長距離四里の道を常州に至り、軍医の診断を受く。其の頃やと少々良くなり、河端兄上や三島君等の世話になりながら入室す。土本上等兵付きそひとなり残っていたゞく。

北山重次郎依然悪容態なり。彼は余り無茶喰ひするから□□らしいのだ。園伍長大分良いやうである。障子もない休養室に泊る。

六月十日

今朝は非常に気分良し。軍医に頼んで退室す。午後、灰谷伍長・古川卯二三君帰る。皆んな揃って■午後二時頃出発、人力車に乗って中隊へ帰る。約四里の道程だった。五十銭とは安い事だ。帰隊したら皆々びっくりして居た。昨日入室して今日帰ったんだか

ら。

午後六時非常呼集。今日出勤水路偵察の青山少尉以下二十名程、敵襲に遭ひ苦戦中との事也。急ぎ救援に向ふ。途中、無事捕りよ六名を捕へて帰隊するのと会ふ。皆無事を祝福す。

尚、本日功績室に立寄り、徐州附近戦斗の功績を見るに、北漕河附近の戦斗に於て、川端第三小隊のみ殊勲者あり。第一小隊無し。残念に思ひ、特に中隊長殿にお願ひして、坂本・川端・松田の三名を、殊勲者として申請するやうになす。地下に眠る海道少尉も、必ずやお喜びの事と思ふ。

六月十一日

夜が明けて見れば、昨日の騒ぎによって大隊主力応援に来て居る。午前七時整列、総兵力約五〇〇が、昨日の下庄郷附近に討伐に出かける。

途中町を通り此レを掃蕩し、問題のクリーク太湖の近く、風光明媚の地に来る。地方民は早くも逃げ去り、影も無し。一寸今日むし暑く、汗ビッシヨリとなる。体の病気がまだすっかり直らない。相当つらい思ひをし乍ら歩く。午後四時半、全員無事帰隊す。雨又もや降り出す。

六月十二日

あゝつかれた。今日は雨降りだし、早くから休もうと思つて居たのに、今日は飛行場警備のため、向ふ一週間服務する事となる。功績事務もあるのに、変な勤務割だけれど仕方無し。一車一輪車二台ヲ頼み、雨の中を出かける。途中、親切な憲兵君の自動車に

会ひ、此れに乗せて貰つて行く。正午、矢納伍長と交代す。昼食・夕食、体がよくなつたのか、とてもおいしい。尚、今日出発際に、弘君から正栄君戦死の便りが来る。余りの事に驚く。あゝ淋しい雨よ。

六月十三日

淋しい便りを受けたまゝ、昨夜はどうも寝つかれなかつた。

朝各方面へ、淋しい悲しい胸の中を、手紙に書いて送る。

昨夜来の雨は豪雨となり、物凄い水つきとなる。一步も外へ出られず。午後漸く雨も止み小降りとなる。守君、青年会へも便りす。

六月十四日

昨日来の雨は上つたるも、^(二)到る所水浸り、歩行困難也。

ニイー達は魚を捕へるに夢中である。大分大きな奴も居る。故郷の鯉取りの事を思ひ出す。明君・静・久吉君等は、相当頑張つて居るとかの盛さんからの便り、さもあらう。

六月十五日

一寸今日は雨揚つた様である。土本上等兵を連れて地形偵察に出かける。時々クーニヤンが居る。我々を見ると、あわてゝ恥しがつて逃げ込んでしまふ。今日家より、正栄君戦死と徐州陥落の祝報が、航空便で来たる。

六月十六日

大雨降りだ、困つたものである。昨夜からドン／＼大砲の音がする。19 i が討伐戦中とかの話である。別に変つた事無し。故郷へ便りを沢山書く。

六月十七日

依然雨降り、警戒も少し楽にして休ませる。全くやりきれないから、午後常州に行かせて間食を買つて来て食べる。飛行場警備も楽でよいけれど淋しすぎる。

六月十八日

午前十一時頃、突然第三大隊の十中隊と交代を命ぜられ、午後一時出発にて帰途に着く。途中中隊の行軍し来るに会ふ。二十日から討伐に参加との事也。中隊長殿に挨拶す。

六月十九日

出勤準備。正午過ぎR長来る。大隊主力も来り、明日より、いよ／＼後溪鎮附近の討伐である。敵は約一〇〇〇と云はれる。

六月二十日

午前一時出発、雨の中、ぬかるみに尻もちをつき乍ら行軍に付、ほと／＼困る。午前七時後溪鎮に到着。敵少々あり。午後大行李襲撃され、戦死一、負傷数名出づ。

六月二十一日

昨日来再び腹具合悪し。埠頭鎮に向ふ。良い町である。気分悪く困る。夜は此処に宿泊す。面白くも無し。大雨降り、如何なつたものも雨にはやりきれない。

六月二十二日

午前八時出発、再び後溪鎮に帰る。中隊は更に午後一時出発、大行李と共にト弋郷に帰る。腹具合悪く、雨のぬかるみ、此頃ほと／＼支那の国がいやになつた。夜は久しぶりに、寝台の上に毛布

を着て休む。

六月二十三日

午前四時起床、午前六時再び後深鎮に出発との事也。自分は何と
かして腹具合をなほ(す脱之)べく、曹長に頼んで休む。雨降り、床の中で
討伐者を気の毒に思ひ乍ら休む。少しは気分良くなる。

六月二十四日

本日より少々天候良くなる。休養す。

六月二十五日

本日帰隊■予定の討伐隊も帰えらず。本日平井・前田等帰隊し、
賑やかとなる。

六月二十六日

正午、田中伍長と週番勤務交代す。土本・西島週番上等兵也。午
後四時頃討伐より全員帰隊す。

六月二十七日

昨今中隊の志気、極めて馳緩(マダ)し居ると判断せらる。殊に、討伐に
行きて金品を強奪し来る者等多きは、極めて不可也。殊に、下士
官や指揮班の者に於て、かゝる者多きは残念である。

六月二十八日

炊事のおいし。平凡な週番勤務である。
食す。おいしい。平凡な週番勤務である。

六月二十九日

久しぶりに演習を少しやる。

六月三十日

脇坂部隊合同慰霊祭が、常州にて挙行せらる。雨降りしきる。涙
雨か。中隊長以下七名代表として参拝す。我等は遙かに黙禱を捧
げる。

七月一日

早や七月の頃となる。未だ梅雨晴れず、涼しいものである。正午
前、慰霊祭参拝者帰隊す。

七月二日

半夏生である。正栄君逝ってより丸二ヶ月目也。正午午前中、中
隊と肅正行軍を実施す。正午矢納伍長と週番勤務交代す。此の一
週間、勤務とは言ひ乍らくであつた。夜間演習に出動す。

七月三日

午前八時起床。朝は中隊長より種々の注意事項あり、午後は中山
公園に於て、約一時間体操を実施す。

七月四日

午前■一時半、非常呼集ヲ以テ全員整列、飛行場ニ向ツテ警備行
軍ヲ実施ス。昨今匪賊ノ行動激シクナリ、各地ニ被害アリ。今朝
モ出発間際ニ、東北方鉄道附近ニ於テ大爆破アリ。皆々緊張ス。
二時出発、ムシ暑い夜テアツタ。トウ／＼小雨トナル。然シ、元
氣一杯午前五時頃未明ニ、飛行場警備隊ニ到着ス。警備ヲ交代ノ
後午前八時出発、飛行場■ノ周囲ヲ警備行軍ヲ実施シ、帰途ニ着
ク。正十二時無事帰隊ス。午後ハ休養。

七月五日

午前七時四十分整列、八時出発ヲ以テ、昨早朝爆破ノ附近ノ肅正

行軍ヲ実施ス。雨降り出ス。午前十時鄒垣鎮ニ到着。此処ハ相当賑ヤカナ町ニテ、被害無ク皆樂シク業ニ精出シテイキル。十時半帰路ニ着キ、正午帰隊ス。嬉シイ此頃デアル。

七月六日

作業・教練・体操等ヲナシ、一日中休ミ。此頃はるゑカラノ手紙少シモ来ナイ。ト言ッテモ此レデ一週間程ナノダガ、待チ遠シクテタマラナイ。病氣ダラウカ、何ダラウカト心配シテキル。

七月七日

支那事変一週年記念日也。

午前八時半ヨリ小学校ニ於テ、勅諭・勅語奉讀式。皇居遥拝、戦没死者ヘノ黙禱、事変ニ関スル講話等実施サル。雨ノ降ル日ニテ困ツタ。内地ニテモ大シタ事デアラウ。

俺ハ今日発熱シ休ンテシマツタ。40近クノ熱アリ。一時ハ大変困リシモ、午後漸クヨクナル。午後ノ雨最モハケシク降ル。戦死者ノ涙雨カ。

今日ノ記念日ヲ迎ヘテ、戦死者ノ遺族ノ方々ノ心中ハ如何デアラウカ。一日床ノ中ニテ、正栄君ノ事、沢崎君ノ事、皆々ノ事静カニ思ヒ手ヲ合ス。

七月八日

午前一時三十分全員起床、分隊長以上集合アリ。突然警備ノ配備変更ニ関スル命令ヲ受ク。第二、第三小隊ハ常州ニ行ク。我第一小隊ハ依然現在地警備。直チニ移動準備トナリ、午前三時半中隊主力ト出発ス。我々ハ午前八時頃ヨリ兵舎ヲ変リ、スツカリ警備

ヲ引キ受ケル。尚、今朝ト戈橋西方4kmノ地点ヨリ約一里半ニ亘リ、橋梁四、道路無数ニ破壊サレル。匪賊共ニモ全ク困ツタモノデアル。

七月九日

中隊主力の去った後は淋しいものだ。然し気楽でよい。俺は本日小隊長と共に、橋梁修繕のため、常州より来る自動車にて現場に赴く。実によくも一晩とかくも破壊したものだと、感心する位、よく破(て)わしてある。

大変暑い日である。朝八時頃、第三師団の交代帰還兵約九〇〇名通過す。凱旋である。楽しい事であらう。然し、我々の事は何時になる事やら。思へば淋しい気がする。午後五時半帰隊す。

七月十日

どうやら小隊も着落ち着いて、上番・下番乍らも、皆楽しく警備する事が出来るやうになった。此頃市場に、ぼつ／＼西瓜が現はれて来た。案外價(た)は安い。大好きな西瓜、楽しみな事だ。今日の命令で、給一等給の命令六月一日附にて出る。有難く思ふ。

七月十一日

中隊衛兵に服務す。衛兵は此れで後にも先にも三回目である。劉河鎮で一回、青浦で一回なり。暑い事／＼、此の頃の暑さ、全く生れて始めての味はひである。衛兵所で西瓜を買って食べる。おいしい事／＼。

七月十二日

中隊主力と別れて早や五日間。考へて見ると、一ヶ小隊の分長は

全く楽である。殊に一小隊には、ずるい下士官も居らず、兵も比較的まじめだし、全く此頃は朗らかに暮せる。又、給与の方も俺に委かせてくれたので、出来るだけ現地に於て青物・魚・肉類を買ひ、おいしいものを食べさせるつもりであり、皆さんも喜んでくれる。演習もなし、匪賊も出ず、唯衛兵勤務のみ、勿体ない位呑気な此頃になった。

それにしても、故郷のはるゑの便りはどうしたのかしら。此頃少しも来ない。心配でくくたまらぬ。

七月十三日

支那の暑さ、盛夏となって味わふに、南の暑さは真に殺人的だ。裸で居ても、夜明けになっても、汗が流れ止まない、寝苦しい毎日である。そして一日中、お茶を飲んだり、西瓜を食べたりして居なくてはやり切れない。従つてそれだけ何でもおいしい。何れにしても、支那の暑さは満州等問題外である。今日午後八時から、大平山に3Dの警備隊を訪ねる目的で行軍約二里、十二時頃汗だくくくになつて帰隊す。

七月十四日

午前七時半起床。夜明け方は多少涼くて、比較的よく寝られた。本日は常州へ連絡のため九時出発、自転車走らせて行く。稲木・高間と俺と三人だ。約一時間で常州城外に着く。賑やかな市場通を抜け■きつた処で、茶屋に入って西瓜を買つて食べる。十時五十分中隊に到着す。中隊はまだゴタ／＼して居り、暑さに皆グツタリと寝て居る。余り良い処でもなささうだ。

午後一時、蓬生・灰谷君等と共に、官舎に堤野君を訪ねる。一年ぶりの面会である。楽しい。而も、此んな戦地で同年兵に会はずとは、夢にも思つて居なかつただけに、余計うれしかった。皆さんで一しよに都カフエーに行き、ビールを飲む。支那クニーヤンの女給さんばかりだ。蓄音機が賑やかだ。花子と言ふ日本名のクニーヤン、一番年も若く奇麗で可愛い。写真を一枚くれた。帰りに一しよに記念撮影をする。

今日故郷の父やキヨちゃんからも珍しく便りが来る。うれしかった。唯、はるゑの手紙がないのが一晩淋しい。六時出発、再び西瓜を食つて、飛行場に寄つて八時頃帰隊す。

七月十五日

大隊長松皮少佐は、恥しい淋病も癒つたので原隊復帰し、今日はト戈橋へ巡視に来ると言ふので、朝から大掃除をなし、準備をなし待つ。九時来る。簡単に巡視あり。十一時に全員集めて訓示あり。午後一時帰隊さる。

中隊長も来られ、小隊の成績よろしき故おほめに預る。戦争は更に永引く事を言はれ、我々の覚悟を促された。今日大平山警備兵六名連絡に来る。

七月十六日

大隊長の巡視も終り気楽になる。俺は今日衛兵勤務であつた。夕方炊事からお酒を上げて、皆さんは大いに飲んで歌ふ。陽気な事だ。然し其の果ては、平井・黒川等の脱線となり困る。困つた奴である。

七月十七日

別に変わった事もなし。二十日余りも手紙の来ない、恋しいはるゑの事等思ひ、何だか気がくよくよしてたまらない。病気だらうか、変わった事でもあるのだ■らうか等々と、やはり俺の心は総てが、はるゑ、はるゑで、埋まって居るのだ。

七月十八日

午前九時、今度新しく来たと言ふ坂江少尉へまだほんの初年兵が来隊、挨拶にも一寸顔を赤らめ二言三言、それでも少尉らしく大きな言を吐いて挨拶した。良い男の大きな体だ。然し、こんな水坊な者まで、少尉としてあがめねばならぬかと思ふと、一寸馬鹿らしくなる。一小隊長でなくて全く幸ひである。聞けば特別志願だと言ふ。弾の下へ行った時の顔が見たいものだ。一寸失礼。

七月十九日

中隊長殿の言ひつけによつて、距馬を構築する。もう別に近くまで匪賊が来るぢやなし、あほらしいけれど作る。中隊長は、非常に心配して居られる様子である。此頃の給与テンハオ也。豚カツ、鯉のサシ身等々々。

(二十日ト二十一日ノ記事ハナイ)

七月二十二日

常州連絡に行く。友田上等兵・土本上等兵・斎藤孝信の三名。天気よく市場の西瓜うまい。待ちに待つて居た、はるゑよりの便りが来て居る。元気で居る由。而も家の父が訪ねていったとか、大したうれしそうな便りである。

帰りに有□写真館にて写真を撮る。勿論目標は彼女に送るためである。よくうつればよいがな。帰りに又、馴染の茶店にて西瓜を食べて、帰隊は午後七時半。はるゑの便りさえ来れば、気もつききする位朗らかだ。美しく優しいはるゑ！

(二十三日ト二十四日ノ記事モナイ)

七月二十五日

有□写真館がト戈橋出張撮影に来る。此の間の僕のやつ持ってきた。思ひかけぬ位よく撮れて居る。写真彼女に送った。きつと喜ぶだらう。強く抱きメてキッスの雨を降らすに違ひない。俺も負けぬ気ではるゑの写真に頬摺りして居ては、楽しい思ひにふけて居たら、遂に気分が出してしまつて、恋のやり場に困つてしまつた。はるゑもきつと同じ思ひ、狂はしい情熱のうづき、夜等夢うつゝの中にまで俺の唇を求め、強い腕の中に抱き締められる日を送つて居る事だらう。

弟からの便りもうれしいもの。重雄も早やから就職に頭を悩まして居るとか。然し、弟は俺より一枚上手な男だから、きつと将来うまく行く事だらう。

(二十六日モ無記載デアル)

七月二十七日

昨夜半、急ニ電話にて出動の内命を受く。何処に行く事やら驚きたり。今日連絡に行く。未だ出動は詳細の事は判明せず、唯近々出動との事なり。多分漢口攻略戦ならんとは皆んなの予測である。待つて居たものが来たのみである。忠義の前には自分を捨て、

(か脱カ)
かるべきのみ。愛するはるゑも又御苦勞ではあるが、暫く苦勞してもらはねばなるまい。身体は離れては居れど心は一つ、常に二人一しよに戦に臨む覚悟に変わりはない。妙法を信奉する二人には、常に幸福がある。

(二十八日モ記載ナシ)

七月廿九日

衛兵に服ムす。山下君常州へ連絡に行き、八時過ぎ帰隊す。よいニュースありとの事。何事ならんと思へば、軍曹に任官との事なり。而も俺は、中隊でイの一番、聯隊で九番目位、群を抜いての恩典、有難い事だ。本日任官者、川口(現)・山本・土田・高間・灰谷・矢納。

(三十日・三十一日オヨビ八月一日ノ記事モナシ)

八月二日

坂本・桜井上等兵と共に常州へ行く。中隊は梱包の最中である。あわたしい事大したものだ。雨の中を出かけて帰る。いよ／＼諸準備にとりかゝる。

(三日ノ記事モナイ)

八月四日

自動車来り、いろ／＼の梱包及炊事糧秣等常州へ送る。気楽になる。出発は八日か十日頃の噂高い。

今日ほるゑからの六月廿九日出の手紙貰ふ。ずいぶん熱烈なラブレターに、すっかり気が立ってしまった。ほるゑも仲々の情熱家だ。僕の佛を慕ってはキッスを求めたり、○○(ハコ)をしたり、写真を

夫と思ひ毎日愛撫を与へ、或はお乳を吸吞んで貰ふ仕草をしたり、愛慾を満足するに努めて居るとか。可愛そうに、せめて一度でもよい、しっかり抱き合つて、キッスの雨を注いで、心行くまで愛してやりたいものだ。柔い白い肌、ほるゑの美しい唇を思ふと、何だか一人ではほるゑが前に立って居る様だ。グツと抱き締めて愛の交換！ 夢中にそんな事を思つて居たら、もうたまらなくなつて来た。

八月五日

朝から大雨である、土砂降りには全く困つた。それでも九時頃雨揚る。青山小隊長常州連絡のため行く。實際は、長い間慰安もなかつたので、中隊長の思召によつて、今日から二泊三日の予定にてP買ひ。奇麗な支那クローニヤンや、日本娘の下で遊ぶのが目的らしい。高木少尉交代に来る。

八月六日

我々との警備交代の、大阪の第十七師団の先発者来る。内地より始めて来たそうである。蚊帳を返納して、蚊が居て寝られぬ。

八月七日

午前九時小隊長帰隊す。

正午は、諸雑品を売却した金で、支那料理を買つて全員会食す。支那料理代金一五四也。支那酒二円五〇錢也。一一種あり、おいしかった。安い事だ■つた。もう手紙も来ないし、淋しい。最後の便りをしておく。ほるゑよ、元気で待つて居てくれ。

七月八日

いよく最後の日来る。午前中は移動準備。小供達にいろ／＼の品物分散してやるやら、品物を売るやら、賑やかな事である。

正午、第一回先発者として高間軍曹以下六名、大直バスにて先行せしめる。午後二時半交代部隊来隊す。総べてを申送り、三時二十分大直バスに乗り常州に向ふ。あゝ、二ヶ月間の樂しかりしト戈橋も、名残は尽さじ。鎮の者達も別れを惜しみ、皆んなで送つて来る。午後四時半無事到着す。常州は流石賑やかな事である。西瓜を五円買つて小隊の者一同食す。

九時から下士官連中皆々、姫買ひに外出せるも、俺は嫌だから止めにす。

待つて居るはるゑ一人が命であり、夫の貞操を守る事が無情に嬉しい。彼女の手紙にも書いてあつた。『恋しい貴男様の清い○○をのみ夢に見て、毎晩少しも淋しいとも思はず、自ら慰めて満足して居ます』と。俺も男である以上は、女もやはり慾しい。然し、はるゑ以外の女はとて接触する気になれぬ。はるゑとの樂しかつた、情熱の夜を思ひ出してもう充分だ。

八月九日

午前六時、点呼と同時に軍装検査。朝食後兵は外出ヲ許可す。それ／＼思い／＼の方向へ、期せずして慰安所へ。俺は勝本・本田・内山君等と共に外出す。都カフェーに行つて昼食。それから支那料理店に行き、支那料理を食し、午後二時帰隊す。

三 覚書

* 五月三日

蘇家子ニ於テ下士□□

長 山本伍長

兵 坂本上等兵 ○

湯谷上等兵 ○

上木上等兵

吉野上等兵

今西幸吉

岡倉信五

矢野義夫

(写真12)

午後二時出発、午後四時半帰隊

* 五月四日

河渡河戦斗

突撃渡河準備作業手トシテ、敵前四十米の地ニ於テ活躍へ第

小隊のみ

山本伍長 田中伍長

山下上等兵

兵 北山重次郎

(川) 河端 守

小林末男

斎藤秀雄

長谷川海陸

小川久次郎

前川 勇 平瀬芳成

佐藤 寛 場馬源次郎

五月四日午後四時三十五分渡河開始、前の部落に突撃、五時十分頃占領確保、第一小隊最も早し。

特に奮戦せしと思ふ者

高間伍長 坂本上等兵 松田上等兵

齋藤秀雄(ハシ) 土本上等兵

黒川上等兵 川端 守

* 五月六日 張八宮ノ戦斗

午後三時半突撃発起、午後四時三十分張八宮占領。第二小隊長等部落の左進出、右方部落内ニ於テ、逆襲ニ対スル応戦及突撃ノ早クシテ、勇敢ニ働キシ者、概ネ左ノ如シ。

突入ノ早カリシ者

蓬生軍曹 品谷菊馬 玉村吉松

加藤英雄 小林末男

突入後直チニ部落ノ先端ニ進出、逆襲ニ対シテ之ヲ撃退セルニ

功ノアリシモノ

土本上等兵 大平虎男

黒川上等兵 稲木上等兵

高間分隊

*五月十四日午後七時病氣の爲の入院患者

上等兵 大滝英雄

一等兵 酒井与一

一等兵

五月十五日 落伍者(ハシ)共

川口拓郎 芳井孝三 山本喜八郎

飯田四郎 小川久次郎 北山重次郎

* 第一小隊現員

第一分隊 五名 (稲木・西村) 七

第二分隊 六名 (齋藤) 七

第三分隊 六名 六

第四分隊 七名 七

第五分隊 七名 七

第六分隊 七名 七

合計三十一名 三九

* 戦闘間成績序列

第三分隊 第六分隊

第五分隊 第一分隊

第二分隊 第四分隊

各分隊長成績

黒川清則 高間伍長

分隊長(ハシ)ノ成績序列

黒川上等兵 稲木上等兵

山下上等兵

机・椅子借用

* 六月十一日

中隊長殿にお願ひし、坂本上等兵・川端守・松田隆男ノ三名ヲ、北肥川附近ノ戦斗ニ於テ殊勲者トシテ申告ス。第三小队ニ於テ、小隊長・田中正・和田恒美上等兵アリ。第一小队ハ以上ニ奮戦セシ故、特ニ此レヲ強調シ許可ヲ得。

* 一 稲木惣市

大田 □

小林末男

和歌芳成

西村安則

吉田辰信

(手帳ノ「メモ欄」ヘノ記述ハココデ一応終了。以下ハ手帳ノ後ノ方カラ「住所録」ノ部分ニ書カレテイル。)

* (写真13)

五月九日 彈薬現在数 榴彈

* (写真14)

* 五月拾壹日 兵器損失検査

一、 帯革破綻 一 薬盒 一 (使用シ得ス)

二、 前盒 四 後 二 (使用シ得)

三、 剣差破綻 一 薬盒 五 油壺 一ヶ

四、 薬盒 七 銃剣 (銃眼曲リ着剣不能)

五、 lg負革 一 (失)

六、 □ □ 一

* 五月十一日 兵器検査

* 中五三 福井県大野郡勝山町吉野 父 太田喜之助

補一〇〇〇 名古屋市東区山田西町五七 父 土本六松

補 七九八 福井県丹生郡越廼村蒲生 父 小林末吉

補一五三七 滋賀県伊香郡境津村宗福寺 妻 古川さく

補一七〇五 滋賀県坂田郡法性寺村 妻母 酒井ヨシ

補四二五〇 福井県今立郡北中山村上戸ノ口 父 藤沢佐吉

* 補四二八一 福井県吉田郡下志比村東古市 父 伊藤多左エ門

* 「七月三十日 後溪鎮連絡 小 以下十五名

八、三〇、十一時 第八中ト連絡

四、〇〇、七、三〇

二ヶ分隊増

八月五日 青山少尉 十二時

高木少尉 七時来る

六日 返 同上 □ □ □ 前田隊

□ □ □ 下四

* 八月六日 軍装検査

七日 十時青山少尉帰隊 会食

十二時高木少尉

八日 二、三〇交替引継

四、〇〇復帰

八、二 俸給三ヶ月分

五

(「」内ノミ薄イ鉛筆ヲ書カレテイル。)
(ココデ「住所録」ヘノ記載ハ終了。以下ハ先ノ「メモ欄」ニ後ノ方カラ書カレテイル。)

*歳何才

救国抗日

*日軍多々有

良民不加危害

今天家婦

(コノ二行ハ万年筆)

(コノ三行ハ青鉛筆)

(以上ノ五行ハ武ノ手デハナイ)

R長注意事項

- 一、現在員ト落伍者調査
- 二、弾薬ト携帯口糧ノ検査
- 三、三分ノ一待期ヲ確実ニ

* 第一小队

総員 五拾四名

戦死 一、海道少尉 張八営ノ戦 五、六

戦傷 川端 守 五、五 張八営東南方一〇〇〇米

○松田隆男 五、四 渡河戦

○前田健二 馳川一次 土本 薮 東 作栄

五、六 張八営

○古川卯二三 五、一八 張二庄

入院

○牧野昌直 松本亘 山口治三郎 五、一 鳳陽

○駒田了一 五、二 鳳陽

○大滝英雄 森下久男 酒井与一 五、一四 鳳陽

落伍者

湯谷典次郎 五、一六五 灘溪口ノ孫汗

其他

中西国男 五、二 鳳陽……内地へ

石内虎男 五、一 ……自動車

* 現在員数

一、七

二、五 <内前川勇>

三、五 小代 一 計六

四、六 <内上木一雄>

五、六

六、六

合計 三十六名

内指揮班へ二名

事故者

戦死 一 入院 七

戦傷 七 落伍 一

其他 二

合計十八名

青浦出発時ノ編成

海道少尉以下五十四名

- * 一、 八、 三、 七、
 - 二、 2、 4、 六、
 - 5、 5、 6、 3、
- 二十六名 四十三名

* 聯隊長注意事項

一、滞陣久シキニ亘ルト、警戒心ヲ欠ク者多シ。

二、警戒区域内ニ於テ多クノ事故発生シアリ、今後再ヒナキ様

警備スヘシ。

三、婦人關係を更ニ良クスヘキコト。

四、胃腸病患者多発ノ傾向アリ。特に早ク良クスヘシ。其ノ

原因ハ

- 1、青物を食スルコト。
- 2、氣候ノ關係。
- 3、水質ノ關係。
- 五、出動ヲ覚悟セヨ。

* 大隊長注意事項

一、週番勤務ノ積極的活動。

二、巡察ノ励行。

三、実行ノ監督。

中隊長注意

衛兵勤務

衛兵ニ於テ私用ヲ達セサル様。

◎軍紀教練ヲ行フコト。

毎日朝夕ノ点呼及必ス体操ヲ実施スヘキコト。

巡察ノ着眼

一、小範圍ノ着眼ヲ定メテ廻ルコト。

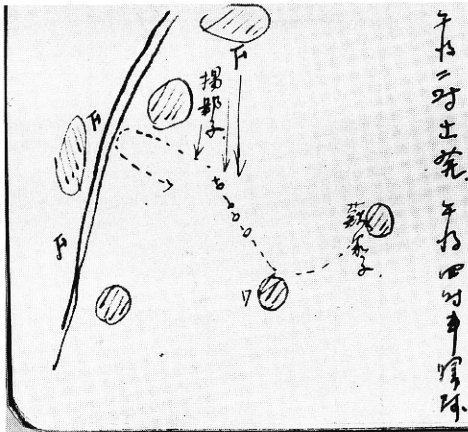
* 八月十日

補充兵トシテ藤沢及伊藤両君編入サル。

一、lgニ付前盒一ケツ、持参。

二、手旗持参、円ビ無シ。

(写真12)



(万年筆)

(写真13)

局番名	電話番號	住	所	姓	名
平 支 店	平 支 店	平 支 店	平 支 店	平 支 店	平 支 店
京 支 店	京 支 店	京 支 店	京 支 店	京 支 店	京 支 店
山 支 店	山 支 店	山 支 店	山 支 店	山 支 店	山 支 店
兒 支 店	兒 支 店	兒 支 店	兒 支 店	兒 支 店	兒 支 店
八 支 店	八 支 店	八 支 店	八 支 店	八 支 店	八 支 店
高 支 店	高 支 店	高 支 店	高 支 店	高 支 店	高 支 店
坪 支 店	坪 支 店	坪 支 店	坪 支 店	坪 支 店	坪 支 店
熊 支 店	熊 支 店	熊 支 店	熊 支 店	熊 支 店	熊 支 店
崎 支 店	崎 支 店	崎 支 店	崎 支 店	崎 支 店	崎 支 店
福 支 店	福 支 店	福 支 店	福 支 店	福 支 店	福 支 店
網 支 店	網 支 店	網 支 店	網 支 店	網 支 店	網 支 店

Handwritten notes in the left margin: 1120, 960, 970, 110, 120, 130, 140, 150, 160, 170, 180, 190, 200, 210, 220, 230, 240, 250, 260, 270, 280, 290, 300, 310, 320, 330, 340, 350, 360, 370, 380, 390, 400, 410, 420, 430, 440, 450, 460, 470, 480, 490, 500, 510, 520, 530, 540, 550, 560, 570, 580, 590, 600, 610, 620, 630, 640, 650, 660, 670, 680, 690, 700, 710, 720, 730, 740, 750, 760, 770, 780, 790, 800, 810, 820, 830, 840, 850, 860, 870, 880, 890, 900, 910, 920, 930, 940, 950, 960, 970, 980, 990, 1000.

(万年筆)

(写真14)

1120	160	160	160
1280	170	170	170
1340	180	180	180
1400	190	190	190
1460	200	200	200
1520	210	210	210
1580	220	220	220
1640	230	230	230
1700	240	240	240
1760	250	250	250
1820	260	260	260
1880	270	270	270
1940	280	280	280
2000	290	290	290
2060	300	300	300
2120	310	310	310
2180	320	320	320
2240	330	330	330
2300	340	340	340
2360	350	350	350
2420	360	360	360
2480	370	370	370
2540	380	380	380
2600	390	390	390
2660	400	400	400
2720	410	410	410
2780	420	420	420
2840	430	430	430
2900	440	440	440
2960	450	450	450
3020	460	460	460
3080	470	470	470
3140	480	480	480
3200	490	490	490
3260	500	500	500
3320	510	510	510
3380	520	520	520
3440	530	530	530
3500	540	540	540
3560	550	550	550
3620	560	560	560
3680	570	570	570
3740	580	580	580
3800	590	590	590
3860	600	600	600
3920	610	610	610
3980	620	620	620
4040	630	630	630
4100	640	640	640
4160	650	650	650
4220	660	660	660
4280	670	670	670
4340	680	680	680
4400	690	690	690
4460	700	700	700
4520	710	710	710
4580	720	720	720
4640	730	730	730
4700	740	740	740
4760	750	750	750
4820	760	760	760
4880	770	770	770
4940	780	780	780
5000	790	790	790
5060	800	800	800
5120	810	810	810
5180	820	820	820
5240	830	830	830
5300	840	840	840
5360	850	850	850
5420	860	860	860
5480	870	870	870
5540	880	880	880
5600	890	890	890
5660	900	900	900
5720	910	910	910
5780	920	920	920
5840	930	930	930
5900	940	940	940
5960	950	950	950
6020	960	960	960
6080	970	970	970
6140	980	980	980
6200	990	990	990
6260	1000	1000	1000

(万年筆)

第五冊

一 解題

形態…小型の手帳、本文四六枚。罫のみ印刷された雑記帳形式。タテ一〇・五×ヨコ六・五cm。左開き、手帳を横にして縦書。日記本文はすべて万年筆で書かれている。

表紙…紫色の紙表紙。上部に「MEMO」とのみあり、武の自署などはない。ただし、扉の部分に自筆（万年筆）で

「福井県丹生郡吉川村平井

山本 武」

とあり、また裏表紙見開きの部分にやはり自筆（万年筆）で

(左) 「 中支派遣吉住部隊

太田部隊清水隊

歩兵軍曹 山本 武

昭和拾参年八月十三日求之

漢口大攻略戦出動 於鎮江」

(右) 「九月三日午前六、三〇 於雲溪崖受傷、右足蹠貫

通銃創、外数ヶ所破片創

九月五日 瑞昌野戦予備病院入院

九月十一日 九江第五兵站病院転送

十月二十四日 第五兵站病院退院

同日 名誉訓練所入所

と書かれているから、映画見物などに出かけたついでにこの手帳を購入したのであろう。

内容…ほぼ二か月休養の後、八月九日武漢へ向かったときから、十一月三日まで。危機に臨んで「南無妙法蓮華経」の題目が頻出しているように、非常な激戦であった模様で、この間九月三日武は負傷して入院し、戦列を離れている。この休みを利用して、九月十三日に戦争の思い出を書き始め、十四日に書き終わったとあるが、事情ははっきりしない。なお、日記は十一月三日の記事で終わっているが、この後の日記はない。付けなかつたか失われたものか定かでない。

覚書は手帳の後ろから書かれている。また九月一日から二日なども誤植ではなく、実際には二行目からが九月二日の記事と思われる。

この後三十六聯隊は、昭和十四年六月中旬まで警備に当たっていたが、やがて帰還が許され、十八日に南京を出発、二十二日には広島沖の似島に到着（手帳をめぐって武が憲兵隊とやりとりをしたのはこの時のことである）、二十四日宇品へ上陸し、二十五日には本隊が鯖江に帰着、全隊は三日までに帰還した。武は今庄駅でハルエの出迎えを受け、七月二日鯖江に到着、九日正式に召集解除となった。なお、昭和十二年鯖江を出発したときは、総勢一九四人であつたけれども、この度五体満足で帰ることができたのは、僅か二十数人に過ぎなかつたという（『従軍記録』『行動概要』）。

二 日記

八月九日

午後四時頃から夕立となり、出動準備に困る。五時中隊は整列、先づ常州停車場に到り休憩す。十九時十三分発軍用列車にて、二ヶ月間の休養を与へてくれた常州駅を後にして、鎮江に向ふ。あゝ、此処に到着して警備に着いた時は嬉しかった。果して何時再び此処を訪れる日は何時の事か、それをのみ楽しみに。あゝ西瓜の街よ！ 支那料理よ！ 楽しかりしト弋橋分駐生活よ！ さらば。雨の中を汽車は急行、一直線に鎮江に…………。九時無事到着。

八月十日 雨

昨夜は物凄い雨の中を、停車場より宿當地に約三杆行軍せし為め、ビショ／＼に濡れて大困り。今日は雨の中に小さくなつて暮す。第六次補充員中隊へ三十五名来て居る。二丁掛の中村修二も同じ小隊である。

雨降つて面白い事も無き為め、室内にてゴロ／＼して居る。指揮班にて勝本君等とウイスキーを飲み、楽しみだった。

八月十一日 晴天

昨夜の雨もからりと晴れて心持良し。松田・高間・勝本君等と外出す。鎮江の街は案外立派な良い都会である。ポプラ並木、広い道、石畳の道、両側の煉瓦作りの家、総べてが内地のやうな感じだ。入浴に入り、顔をそつて良い男になり、東京カフェーにて久

しぶりに日本酒にて飲む。支那の女でも相当可愛ゆく、面白いものだ。

然し、はるゑの事思ひ出すと、馬鹿らしいやうだ。大分歩いても、はるゑ程の美しい娘も居ないやうだ。尚今日、■■■■伊之助君と加島に軍酒保でヒョッコリ会ふ。

八月十二日 晴天

午前八時整列、行軍。出戦を前に控へて、未だ行軍を実施せよとの上司の命令、余り可愛さうだ。今日は約三里の行軍を実施す。歩いて見ると相当暑い。落伍者も二、三人出来た。午前十一時帰隊す。此んなに暑くては、漢口攻略の山地行軍が思ひやられる。午後ビール及ウイスキー上る。ウイスキーを飲んだら酔つて困つた。腹が痛くなつたし。午後四時から兵器検査実施。

八月十三日 晴天

午前八時半より、銃剣術・体操を行ふ。十時帰る。今日、はるゑ・父親等へ手紙出す。午後三時から、小隊長を中心に、一小隊の各分隊長全員記念撮影をなし、それからカフェー〇〇にて会食をす。軍隊が多勢にて、何処へ行つてもビール・サイダー・酒、あらゆるものが品切れ、唯食事のみである。日本料理はなし。ピフカツ・ピフテキにホワイトソウスで食事。後からトマトを食べたのは、何と言つてもおいしかった。

午後五時半から東亜劇場に行き、映画を見る。漢口方面及黄河欠潰のニュース映画あり。それから現代劇、杉狂児・星令子主演の「のぞかれた花嫁」、時代劇、大河内伝次郎の題名不知の前後編物

等あり。「一人は若い」、ほんとに面白かった。甘たるい青春の二人の姿、新婚旅行中の異変、ユーモア続出、何だか二人を俺とはるゑに当てはめて見たいやうだ。若し凱旋する日があったら、はるゑと二人でまだく甘美な場面を展開して、二年間の積み積つた青春の気分を、互いに満喫したいものだ。

八月拾四日 晴天

今日から内地では旧のお盆である。昨日来の腹痛もやうやく良くなつた。午前七時整列、行軍実施。乗船場の方から停車場方面にかけて一廻りして来た。汗びっしょり。ほっこりいやになつた。六中隊の川原の三ちゃんに会ふ。斎藤にも会つた。午前十時帰隊。勝本・蓬生等と、サイダー・コーヒ・エビフライ等と食へに行き、入浴をすませて一寸良い気持になつて、昼食は又、南京ばかりの事とおいしくもなし。

八月十五日 晴天

午前八時半頃から、急に乗船の噂高くなり、毛布梱包。午前十時命令来り、部隊八午後二時半乗船と決定す。諸準備も整へる。乗船地勤務員ハ一時半早くも出発。俺はせめてもう一本手紙をやりたいたと思つたが、どうも駄目になつた。更に此の間の一小隊の分隊長の記念撮影も、ファエラとは情無い。

午後一時整列、此の時木下清君に会ふ。第四中隊であるらしい。二時乗船場に到着。午後三時半鎮江の港を出航、○○方面に向ふ。行く手は雨か、嵐か、将た暗か。ザア／＼夕立が降つて居る。

八月拾六日 晴

盆の十六日、地獄のお釜の蓋さえも開くと云ふ此の日も、船中暮し。朝は涼しくて洵に爽快である。午前九時三十分、南京・浦口を通過す。あゝ幾多思ひ出の南京よ、浦口よ。大戦艦が黒煙を吐いて居る。濁流とう／＼、悠久三千年の歴史を物語る大長江。船はドン／＼／＼朔江して行く。午後五時過ぎ蕪湖に到着、船ハ定泊す。立派な港街である。何だか夢の国、外国の街へ遊びに来たやうな感じがする。暑くて眠れぬ日である。あゝ。

八月拾七日 晴天

午前九時三十分、美しき港街蕪湖を後にして出帆、いくら逆上つても少しも揚子江は狭くもならぬ。洋々たる大海を思はせる。午後ハ衛兵勤務に当る。司令以下十六名、歩哨掛は土本及細川両上等兵、午後二時より服務す。午後三時危険地帯に入り、駆ちく艦より砲撃を以て威嚇射撃をなす。

午後七時船は定泊す。今晚は特別灯火管制がやかましい。今までに度々此の附近に於て、襲撃を受けたとの事なり。

第二小隊の加藤得治の浪花節面白い。

八月拾八日 晴天

昨夜半十二時出船したる暗黒の神龍丸は、危険地帯の中を前進す。午前七時頃、再び敵中に入りたるとの事。敵弾時々船首附近に落下し始む。友軍の軍艦からも応射、カタ／＼／＼、チエツコの銃声も聞ゆ。然し、一発も命中はせず。海軍水上機二機飛来し、対岸に爆撃をなす。約一時間交戦にして敵影無し。

正午頃、前方にポツカリ塔が見え始め、安慶の近きを示す。十二時三十分安慶に泊る。軍艦も居る。水上機も十数機入り乱れて何か演習の最中。飛行場もあるらしく、陸軍機が左岸より飛び立ったり、着陸したりして居る。奇麗な大きな街である。蕪湖よりも更に立派である。先刻見えた塔は、奇麗な姿を青空高く聳へて居り、白亜の洋館は立ち並び、水際の街の美しさ、竜宮の如き感あり。此んな街に警備する軍隊の幸福さを思ふ。

余り大激戦もなかったやうな様子、市街は損傷して居ない。自動車がブー／＼走って居るのがよく見える。山手の方は青々とした小松原、別荘地帯なのだらう。午後二時衛兵を無事終って帰る頃、船は安慶を後に更に遡江し始む。奇麗な街安慶、夢の水の都は段々かすかに消えて行き、唯悠久幾百年、歴史を誇る塔のみが何時までも見えて居る。

西日は暑い。甲板は兵隊で一ぱいだ。午後八時まで外にて夕涼み。八時以降は危険につき、全員船内に入れとの事にて、暑き船内に入り、衛兵の疲れにて、知らず／＼寝てしまふ。

夢に出て来たはるゑとの恋のさゝやき、忘れられない後味がある。あゝ恋しい女、はるゑ、はるゑ、幸いあれ。

八月十九日 晴天

昨夜は殆んど長江上に休泊し居り、午前三時頃出帆し九江に向ふ。午後十二時三十分頃湖口に到着。午後三時半九江沖に到着す。いよ／＼来るべき所まで来た感がす。先発者は上陸とか何とか騒いで居たのに取止め。五時頃より再び命令により湖口に引き返す。

軍隊の仕事は何をするのか判らない。今晚もやはり灯火管制下に、^(船)潘陽湖の入口に定泊す。船の中も余りに給与が悪く、来る日も来る日も乾燥菜やひらき南京のみ、ほと／＼いやになってしまった。八月二十日 晴時々曇り

午前中別の上陸命令もなし。無為にまづい飯を食べて居る。正午頃急に、勤務員と第一小隊のみ下船、上陸との事にて準備をす。一時か四時になつても下船せず、とう／＼取止めとなる。潘陽湖の入口のみにても、^(マ)尤に日本の琵琶湖位の広さあり。今朝は時々ドン／＼砲声が聞えた。情報によれば、漢口攻略は、まだ九江より大して進出して居ない由、やはり我々の上陸を待つて、一挙に総攻撃と判断せられる。

夜はひとり郷愁にはるゑを思ふ。

八月廿一日 晴天

^(船)胡糖方面ヨよりの上陸不可能につき、朝再び湖口に引き返す。第一大隊の台海丸は陸揚げを開始す。午後一時より上陸準備。先づ馬を下船さす。第五中隊は対空射撃部隊として、午後三時半繩はしごにより、^(カ)円手船により湖口対岸に上陸す。此より先、発動機船のため船のトラップをへし折られ、遂にトラップを使用不可能にしてしまつて大困りだ。

湖口対岸にて大隊主力の上陸を待つ。午後六時頃であらうか、一大音響と共に、神龍丸の船尾の方に於て、■爆破らしい水柱が立つ。衆人何事ならんと見て居る。やがて機雷の爆破であるとの話伝はり、兵及船員等死傷三十数名あつたとの事。大変な事が出来

たものだ。上陸早々に此の始末。而も第六、第七、第八中隊は、未だ下船せざりし為め、損害あつた模様である。船は見る／＼中に沈み行く。然し水深が浅き為め、暫くにして船底が水底につかへ止る。

午後八時頃、やっと大隊全部の上陸を終り、揚子江にそひ約二時里前進して露営す。

上陸第一歩、いよく大戦争が始まらんとするか。

八月二十二日 晴天

午前九時大隊へ出発、第五中隊へ尖兵中隊となり前進、漸く山間地帯に差しかかり、道又坂多し。太陽は物凄く焼きつき、殺人的暑さとは正に此の事ならん。落伍者相亜ぐ。午前十一時半頃より午後二時まで、昼食のため大休止せるも、湯茶の準備等のため大して休まれもせず。二時出発、益々暑さきびしい。午後三時三叉路に達す。右は九江に至り、左は胡糖方面に至る。凹部にて二十分間休けい。瞬く間に皆へな／＼と墮れる。

而も無慈悲極りなき馬鹿な大隊長は、更に前進を命ず。灼熱地獄とはかくの如き事ならん。温度は百三十度あり、而も重い背ノを背負ひ、フラ／＼と歩く。此の時既に中隊でも七分通り落伍し、我分隊にも四名の落伍者出づ。恐しい事だ。約三キロ前進して止った時には、驚くべし、大隊全部でやっと百名に至らず、而もMGの兵一名、日射病のため死亡したとの事である。午後七時まで大休止、落伍者を収容す。午後八時過ぎ宿舎に入り、ビール・サイダー等下給品を貰って、やっと落ち着く。然し、今日の道は異つ

て、明日は再び引き返さねばならぬかも知れぬと噂始む。困った事だ。

南無妙法蓮華經 合掌

八月二十三日 晴天

午前三時半起床、六時大隊は集結、再び昨日の炎熱にあへぎ／＼歩いた道を元がへり、八時頃三叉路に到着。日光は漸く強く、再び昨日の如き地獄の凶絵を現出す。約二〇〇〇米行きし処に、吉住部隊野戦倉庫あり。次には支那軍の新兵営立派に建つて居る。現在、兵站部或は各部隊の司令部になつて居る。此の頃又もや落伍者続出す。大助野郎はかまわず前進させるし、困つたものである。第一大隊は此の附近に宿営して居る。午前十時頃宿営地に到着す。宿営地と言つても唯野山である。天幕を張り宿営準備をす。国に捧げた身乍ら、此の辛さ、此の苦勞、あ……………。

八月二十四日 晴天

暑い乍らも昨日の疲れもあつて、夜はよく寝た。夜明けは流石に冷える。気持良い。本日は休養、天幕の中にて休む。コレラ菌が居るから絶対使用禁止の、湖水の中へ入つて水を浴びる。何もかも忘れて気持が良い。

夕方、木下清君尋ねて来る。元氣である。第一大隊は、今晚六時出発するとの事である。サイダー・ビール・酒等下給せられ、おいしく飲む。九時過ぎまで騒いで居て、中隊長に叱られて寝る。明日は午前三時起床、四時出発の予定。

八月二十五日 晴天

いよ／＼第一線参加の爲め午前三時起床、四時出発。第五中隊は旅団の尖兵となり、六時過ぎ九江を出発。先づ陳庄に向ふ。朝の行軍は気分が良い。九江停車場附近より南昌行きの鉄道線路附近にかけての戦の跡、相当物凄いな感じがする。此の附近一帯は、海軍陸戦隊の占領せし処である。揚子江に沿ふ道路を前進／＼、遂に日は高くなり、暑さ物凄くなる。午前九時陳庄の軍橋を渡り、約一里前進して大休止点に到り、午後七時まで大休止。蠅と暑さのため眠られもせず、大いに困る。

午後七時整列、師団行軍序列に

八月二十六日 晴天

再び一里の道を引き返し、軍橋を渡り、道路上に出る。第五中隊の一小隊ハ、II大行李の後方行軍となる。午前二時頃まで、師団の集結、行軍隊形を作るを待つ。二時半出発、歩き出したら大した事、一挙に二時間以上の強行軍、休ケイもなく大困り。II大隊の兵、団をなして落伍して居る。五中隊も半数以上の落伍と見ゆ。きたないクリークの生水を飲み、汗を流して歩く。全く歩兵部隊ハ行軍になるとみじめなものだ。瑞昌まで約七里、行けども／＼到着しない。身体綿の如く疲れる。正午約一時間休み、その間に昼食、夕食の準備。

此の時第一小隊で、■俺達と一しよに来た者僅かに十名程、後二十四名となる。藤沢は全く偉い男である。あの小さい身体で頑張り続けて来た。中村は駄目だ。

午後四時、瑞昌にへ／＼／＼になって到着す。五時出発。それより

直ちに第一線参加と決す。則ち三十五Rと交代し、第二大隊は左第一線となるのである。瑞昌より約一里前進、一部落に入る。此の時雷鳴と共に大雨降り出し、全く弱り目にたゞり目、泣き面に蜂とは此の事か。然し今晚は、第一線ながらもよく眠れた。

八月二十七日 晴天

本日は先づ休養との事にて、本部の位置に於て休む。午後一時頃本部は前進する爲め、予備隊も続いて前進、約八〇〇m行き飯を炊く。此処にてサイダーを五人に一本宛貰ふ。余り少量にて、あつけない乍らもおいしかった。

午後五時、第一小隊ハ、第八中隊の一ケ小隊と交代する命を受け、易家湾附近に進出、第一、第五分隊は山上に於て射撃、大隊主力を援護す。第二、三、四、六各分隊ハ、易家湾にて敵と相対時す。午後八時半、我々も又小隊主力と合す。敵は極く近くにて、敵弾物凄く、すっかり困つてしまふ。夜は、やかましい位飛来する敵弾に、眠るわけにもゆかず、而も蚊がひどくて目覚め勝ちである。夜明け頃、敵は退却を開始せるものか、弾の音も聞えぬ様になる。

八月二十八日 曇天

夜明けと共にいろいろお菜をなして、おいしく朝食をすます。午前八時出発にて、大隊主力と合すべく西進す。無名部落を占領、敗残兵を捕へ、或は射撃しながら毛家墩まで前進。大隊と連絡をとるべく山の方に行かんとする時、急に前方約六〇〇mの高地より猛烈なる射撃を受け、危険極りなし。辛じて部落まで後退し、銃眼をつくり射撃をなす。午前九時三十分、第十二中隊峰金少尉

等来る。我々と同じ任務の下に、背ノを下し、物々しい力み方で来る。

土本上ト兵以下四名、中隊連絡兵と連絡せしむる為め、易家湾に赴かしむ。十時帰隊す。即ち第十二中隊に陣地を申送り、坂本伍長等の案内により、十二時出発にて大隊本部の位置に出発す。約一里半前進し、昨夜の本部の位置に近づいた時、急に斜左より側射を蒙り、アット言ふ間もあらばこそ、高橋上等兵は左側胸部貫銃創にて戦死を遂ぐ。俺は驚いて百方手段をつくせど、既に事切れて居る。時に午後一時三十分なり。敵弾益々激しく、如何ともしがたく約一時間半此処に居り、三時敵弾下を前の部落に入る。此処にはIAの弾薬小隊居る。

夕食・朝食を炊き出発を待つ。本部までの距離約一里とかの話なり。此の時MG隊の者より、第一線に於て今朝中隊長負傷の報を聞く。又東谷軍曹・杉山上等兵等其の他数名、戦死傷あるとの話を聞く。中隊長負傷しては全く万事休矣。困った事である。無傷でやり通し、而も一〇勇敢にして人格者だった中隊長が、漢口作戦の緒戦に於て負傷しては、全く残念な事だ。隊長の心中を思ふ時、更に気の毒でならない。不束な俺のやうな者も、益々責任は重くなると言ふもの。につつき支那軍をやっつけるべく、更に御奉公に精出したいものだ。(二十八日四、三〇)。

南無妙法蓮華經 合掌

八月二十九日 晴天

第五中隊、多大の犠牲を払ひ占領せる南張村附近の丘陵を退き、

午後六時本部の位置に到着す。何だか久しぶりに中隊の皆んなと顔を合せた様な気がする。

中隊長殿の負傷の状況や、友田上ト兵・宮田武雄等優秀なる兵戦死。灰谷軍曹・本田伍長・田中上等兵・大平季・田中静・室井徳次郎・長田伍長等、多数の負傷兵ありし模様を聞き、今更戰鬥の激しさを思ふ。可愛さうに全く気の毒な事だ。殊に友田上等兵は年も四十才、而も蘇州河戰鬥に、中西等と共に、俺の分隊で最もよく働いてくれた勇士であつたゞけに、佛去らず、どーしても忘れる事が出来ぬ。突撃寸前に手榴弾の為、全身グタ／＼になつて、壮烈無比の戦死をしたとの話である。あゝ英霊よ、君の為日なり瞑目を祈る。

午後七時夜暗を待ち前進、第一線に出る。暗い道をウト／＼と歩き、不整地の事とて全く困つた。第八中隊の前線と交代、警戒配備に就く。第一大隊方面に夜襲のカン声聞ゆ。第七、第八中隊も、二十九日午前三時頃正面の敵を夜襲す。

八月二十九日 晴天

物凄い彼我の交戦、夜襲の反覆の夜は明け離れた。敵の射撃は依然止まない。第七、第八中隊第一線、第五中隊予備隊、午後五時攻撃開始と定まる。

然る、^(に脱之)午後四時頃より、正面山の敵漸次退却を開始す。大隊は、新道方向に進出すべく、先づ第五中隊の第一小隊、第二小隊平地に進出す。俺は昨日より、青山少尉中隊長代理となりし為め、第一小隊長代理を命ぜらる。部下を率ひ、李村南方の二軒家に到り、

足を伸ばして休む。

丘陵一帯の敵は、退却せるものゝ如し。

八月三十日 晴天

起床と同時に豚を小隊で二頭殺し、朝食のお菜は里芋と豚肉で食べる。久しぶりの油気おいしかった。

午前八時中隊本部へ連絡をとり、中隊より曹長来る。「呉」附近の敵情偵察を命ぜらる。田中伍長以下七名出す。午前九時無事帰隊す。呉附近に敵影無しとの事にて、小隊ハ午前十時出發、呉に向つて前進す。正面の山腹及附近部落一帯に、敵多数発見す。lg二、狙撃手十名を配置し、昼食炊事中の敵及陣地構築中の、ウロ／＼して居る敵を、一挙に猛烈なる射撃を浴せたり。敵はあわてふためき、驚いてオロ／＼するのみ。多大の損害を与へたるものと認めらる。

敵弾漸く激しくなりたる為め、一先づ射撃を中止し、呉内に引揚げ、lg一、歩哨二組を配置し、敵情を監視す。

午後二時頃第三小隊交代の爲め来る。大瀬准尉の話により、我々の占領せし部落は呉に非らずして、曹家北方の部落なる如し。

三時十分引揚げ、本部の位置に列■歸る。中隊長及大隊副官に報告す。俺の要函報告其の他の処置、適当にして要を得て居ると賞められ、面目を得たり。李村に宿泊。

八月三十日 夜

李村に泊ると思ひしに、大瀬小隊相当危険性ありとの事にて、中隊主力も呉に向つて前進する事に決す。午後九時半頃、夜行軍を

以て曹家に至る。第三小隊は、敵中にあるとの■心配より、我々の占領せる呉を捨て、五百米も後方の部落内にひっそりと集結して居り、戦々恐々たる有様なり。

中隊主力来るや活気づく。夜は三分一待期の姿勢にて撤夜す。

八月三十一日 晴天

本日は例年ならば平井のお寄。朝から若い衆は、飾り物やら角力の準備やら楽しい事だのに、今年はほんとなつまらぬ。此れも皆東洋平和の禍根本を除く為め、大君のための戦ひのためと思へば仕方もない。聞けば中隊長殿は、上海後送になったとか。灰谷軍曹は後送途中再び胸部貫通を受けて、生命覚束なしとかの話あり。心配して居た夜も明ける。すが／＼しい朝だ。第三小隊は呉に再び前進す。第二小隊続いて前進。午前十時、本部も呉に向つたとの事にて、我々も続いて前進す。昨日はあんなに物凄か呑気にして入つた呉なのに、今日は腹背両側から敵弾を受け、危険極りなし。かくする中敵は、俄然迫撃砲を釣べ打ちに射ち始む。部落に入つてからの迫撃砲の物凄さ、上海戦の折と同じだ。我々の居る直く近辺に、ドカン／＼落下して来る。

午前十一時半、遂に第三分隊の真中に二発落下命中し、平井上卜兵・芳井・長谷川・吉田等軽傷を受く。芳井は一寸重さうだ。かくして居る中にも、ドン／＼大きな音をさして落ちて来る。ヒュル／＼、ドカン／＼、余り近くに命中するのでいやになってしまふ。小隊の兵は、家の中の天井のある家へ入れて、現在の所待期中である。下土哨一組を配置す(午後一時記)。

迫撃砲の威力は依然劣ず、旺に命中す。本部の半田上ト兵負傷し、川尻等二小隊で三名負傷。俺の小隊でも小形清和が、芋掘りに行き帰り来らず。心配して居た処、不幸にも頭部に迫撃砲を受け即死して居る。あゝ悲惨！憎き敵、友軍の山砲や飛行機は何をして居るのか。

夜はそれでも少し弾が少なくなってよく休む。

夜半、左手山の方にて大騒ぎあり。彼我の銃砲声物凄く夜襲らしい。皆武装して敵来るを待つ。然るに来らず。只、第七、第八中队方面、相当激戦なりし模様なり。

九月一日 晴天

いまわしい夜が明ける。朝早くは迫撃砲も来らず、比較的呑気に炊事等して居る。午前九時半頃、第五中队は今宵薄暮を利用して、正面の高地を占領すべしとの命令を受く。右第一線ハ七、中队は左第一線である。現地偵察のため暑いのに行きし処、迫撃砲に見舞わる。敵ハ悠々と大きな姿勢をして歩いて居り、腹が立つやら口惜しいやら、今晚の攻撃も並大抵ではない事がよく判る。四方八方から敵弾を受ける覚悟が必要である。

午後一時、一小隊より監視兵を出し、敵情を見、警戒せしむ。午後三時までに準備を完了し、五時行動を開始し得る如しとの事。夕食を終り、朝食を準備して時の来るを待つ。第一小隊は右第一線である。一か八かやるのみだ。勇敢に……成功せば、如何に大隊全部の者が喜ぶ事か（午後五時出動直前）。

此の記事書く中に出発命令下り、先づ前の台上に至る。一挙に赤

はげの山を占領すべく、午後六時、第二小隊ハ左、第一小隊ハ右第一線、第三小隊は此れが攻撃援護のため、左前のコブを占領する事となる。

第二小隊は敵弾物凄き中を、田圃の中より前進を開始す。我々は山つたひに前進し、山の左端、赤はげの山の二百米位前に出る。コーリヤン畑の畦に身をひそめ、第二小隊と協力、一挙に行かんとすれども、右第一線の第七中队進出せざる為め、危険極りなく前進出来ず。かくする中、日はとつぷり暮れて、指揮班との連絡も切れ、徒らに時を過ぐ。九時頃、命令受領者の山本伍長来りたるため、指揮班と連絡す。やがて杉田曹長も来る。取り敢へず俺は中队長の下に至る。第二小隊不明との事なり。松田軍曹・堀田・太平伍長等

九月二日

(日付ハ欄外ニ書カレテイル)

三名負傷との事を聞く。二小隊不明のため、そのまゝ指揮班は一小隊の位置に来る。第三小隊をかへて、是が非でも前の山を奪取せよとの大隊命令に基き、夜襲を以て占領するの決心を定める。午前一時か二時頃、静粛に前進を始め、田圃の中を前進す。

途中敵の発見する処となり、猛烈なる射撃を背後に受くるもかまわず、やうやくにして川を突破し、赤はげの台上の下に取りつく。敵の歩哨が「誰カ」と日本語で数回誰何す。今はちゅちよすべきに非ずと、右第一、左第三にて山に登り始む。敵は余り居らぬかと予想して居りしに、あに謀らんや、三銃のチェッコを配置し、

猛烈に射撃す。

突撃発起の線に至るや、手榴弾を雨の如く投擲し、如何ともし難し。戦死傷者は続々と出で、数回突撃を試みるも、遂に敵は退去するに至らず、却つて益々頑強になるのみ。かくする中東の空は漸く白み、遂に夜は明け離れてしまった。残念なり。突撃の気力もなく、中隊長・大瀬准尉も負傷し、今はすっかり駄目になる。一先づ山を下る事とし下山、ふもとに塹壕を掘り集結す。然るに、中隊長始め田中伍長等、多数の負傷者見当らず、心細くて仕様がない。

あゝ遂に孟家宅の二の舞だ。否、それ以上の悲惨さである。敵は腹背に居り、今は何らの術もなし。只、夜来るを待つのみ。負傷者はうめき、水島上卜兵は遂に戦傷死し、伊坂エ生兵も戦死してしまった。

一小隊でも、沖一馬・伊藤静男・松下栄・斎藤孝信・飯田上卜兵・田中伍長の負傷は確実にして、その他加藤彦松・前田梅吉・佐藤寛・吉川卯二三・西村安則・前川広の姿が見えぬ。

雨が降り出す。頻死(マツ)の負傷者が可愛さうだ。体はズブ濡れ、敵は度々襲撃し来る。此れを撃退しては、時の流れるを待つ淋しさ。あゝ、命もこうなればほしくもないと思ふ。そして死にたくもないのだ。只、こんな苦戦に陥つたのが口惜しい。世の中に神仏がありませんなれば、何卒助けて下さい。

我等五中隊の者全部に、死ねとの思召しだらうか。それならもつと楽に殺してほしい。飯はなし、雨は降り、本部へ連絡に出して

も危険にて行けず、引き返して来るし、もう万策尽き果てた感がある。今晚は我々の血の流(を)した此の戦場を後に、本部の位置に引き去る事に決したるも、その帰る途すら敵で一ぱいにて、帰れそうもなし。物も言はず、皆々しょんぼりと何を思ふか、壕の中に伏せて居る。頼むは夜来るのみ。負傷者を率ひて後退するのにも並大抵ではなからう。

それにしても中隊長はどうしたかしら。孟家宅の折のやうに、戦死して死骸も持って帰れぬやうな、悲惨な事がなければよいがと、そのみ心配だ。第二小隊は如何したやら？

此んな残念な戦争があるだらうか。日露の戦に■夕チバナ中佐の戦死された時も、きっと此んな気持だったに違ひない。何故此の附近の九十五師はこんなに強いのだ。漢口・武昌の陥落は何時の事だらうか。

戦争は何時済むのだらうか。

御国に捧げ切つた此の身体ながら、やはり心の底には統べての兵士が、楽しい凱旋の日の光景を夢見て居るのだ。その夢も一発の手榴弾、一発の迫撃砲、一発の小銃弾によって、無残にも破られて行くのだ。何たる悲壮な事だらうか。

動員下令以来、早や丸一ヶ年に余す処七日だ。去年の今頃は、百三十六の出征兵に面会で忙しかつたものだ。正栄君に面会に行つて帰りに、正栄君の父さんが長泉寺の坂の上から落ちて、少しけがしたのは明日だ。

俺が分会長として、干草等■いろいろ骨折つて居たのは此頃だつ

た。故郷では此んな淋しさ苦しさも知らず、今では豆引きの最中だらう。農林一号も刈る準備して居るにちがひない。八朔も済み、此れから多忙になる事だらうな。然し、漢口が落ちて、俺が無事であったと言ふ通知があるまでは、心配して居る事だらう。

親思ふ心に勝る親心、わきてお母さんの気持、はるゑの気持は如何ばかりだらう。その気持も遂には無にすべき死の時があるかも知れぬ。もうそんな事は考へずに置かう。俺は妙法に絶対信頼して居る筈ではないか。有難い妙法様を信奉し、統べてを捧げて御国のために働かう。せめて今日の戦闘、今晚の行動のみにても安らかに運ばせてほしいものだ。

どうぞ神様仏様お願ひします

南無妙法蓮華經 合掌

戦死者の冥福を祈りて

南無妙法蓮華經 合掌

中隊長殿始め皆々の安全を祈りて

南無妙法蓮華經 合掌

〈午後四時半記〉

雨はやがて大降りになり、狭い壕の中は泥でドロドロとなる。

午後五時半頃、突然左手の方より、敵は果敢なる逆襲を試みて来る。榴弾を打ち乍ら前進し来り、やがてチェッコの援護の下に、ヤア／＼／＼叫んで突撃し来る。我等はせめて、晩まで発見せられざるを、唯一の楽しみ希望として居たのに、かゝる上はもう術もなく、すっかり決死の覚悟を定める。敵は三回に亘り反覆攻撃し来りたるも、勇敢にして、已に生命を賭して戦はんとする日本

軍人には、抗すべくも非ず、多数の犠牲者を出して退却す。時に午後六時二十分なり。此の戦闘には統べての者が一致、死に赴く決心あり。落着いて戦つたのが、此の危険な時をうまく切り抜ける事が出来たものだと思ふ。

此の戦闘に於て、可愛さうにも伊坂エ生兵は、腹部貫通にて「殺してくれ」と叫び乍ら戦死。藤田英雄上ト兵・畝田外吉は手榴弾にて戦死。又大石上等兵も遂に名譽の戦死する等、バタ／＼と噓されてしまった。雨は依然降り止まず、淋しい時が過ぎて行く。午後八時、漸く待ちに待つた夕暮れが迫る。中隊長代理杉田曹長と相談して、兎も角一旦II本部の位置に引き揚げる事とし、敵の重囲を突破して脱出を企図す。

負傷者は、各自の分隊にて収容する事とし、午後八時半トボ／＼と重い足を引きずり、空腹を忍んで帰り出す。幸ひにも敵兵は我々に気付かず、無事危険線を出、川を渡り、元のコーリヤン畑附近に来る。向ふから来るものあり、「誰か」と叫ぶ。「友軍」「山」「川」、完全に友軍なる事判る。見れば第七中隊の山本准尉以下二

ヶ分隊である。今決死隊員となつて、第五中隊に連絡に赴く途と判明す。互に途中で会つたのを喜び合ひ、取り敢へず本部の位置に行く。本部は前進して台上に出て居る。大隊長に状況を報告し、負傷者を収容して、先づ元の宿舎に帰り、今晚は休養と決る。帰つて見れば、田中君や中隊長等多数の患者は、帰つて後退した事判明す。唯、吉川卯二三・斎藤孝信・山下重春・佐藤寛が生死不明である。他の小隊にも多数ある見込みなり。細井の世話にな

り御飯を食べる。何とも言へぬうまさ。やがてサイダー・琵琶缶下給され、疲れも忘れて生き返った様な気がする。

九月三日 晴天

やっと帰ったと思つて安心したのも束の間、やがて第五中隊は、命令なくして後退したのである故、直ちに出動、大隊主力と協力して雲溪崖を占領せよとの命令出ず。第二小隊も連絡つき帰つて来る。此の命令を受けた時の気持、何とした無理な命令だらうか。何と軍人はつらいものかと思はれた。然し、今度は大隊長も自ら突撃して行くとの話。而も聯隊長は、二大隊の兵は一兵に至るとも雲溪崖を占領せよとの厳命。今は苦しいとか、眠いとか、空腹とかこぼして居る場合に非ず。男らしく決心をして、うらみ深い雲溪崖に行くのみなり。

正に出発せんとする時、稲木伍長が遺骨護送より帰つて来る。そして、俺の家の者に会つて来、弟とは一時間以上も話して来たとの事にて、沢山の懐しい写真やら、手紙・ドロップス等持つて来て下さる。死の門出に、故郷の懐しい写真を見て、胸迫り、涙流れる。

午前三時出発命令下り、俺は大隊主力の道案内となり、最先頭に立ち前進す。午前五時頃雲溪崖のたもとに到着す。第八中隊長真目中尉に連絡し、先づ八中隊を以て赤はげの台上に突入。五中隊は雲溪崖の頂上を極めて此れを占領すべく、けわしい崖山をいばらにかゝり、岩に足をすべらせる等、丁度登山の時のやうに、手がかり、足がかりで登つて行く。中隊指揮班と第二小隊は、曹長

が最先頭に立ちて左の方から、第一小隊と三小隊■は、俺が長となつて右の方から、皆々元氣一ぱい勇敢に登つて行く。

午前六時半頃、丁度七分通山を登つた折、上から下から射ちまくつて居る敵のチェッコ弾の爲め、バタ／＼／＼／＼狙撃せられてしまった。俺の直ぐ後から来た湯谷伍長がバツタリ噓れる。「湯谷君やられたか！」と叫んだ時は、他人事ならず俺の足が痛い。自分ではあわてたはずみに、岩に足をぶつ／＼けたのかと思つて居たのに、どうも弾が命つたやうだ。無意識に巻脚絆を取り、靴を脱いだ。湯谷君は何ともなく、「班長、やられましたか」とかけよる。山本義孝君が来て直ぐ手当をしてくれた。傷は左足背より足蹠の擦過銃創と、他に数ヶ所破片傷を受けて居り、手も痛むし、右足・胸・額等も痛む。然し軽傷だ。此処で弱気を起しては小隊の志氣に拘わると、高間軍曹に頼み、しっかりと頑張つて、是非此の山を占領してくれと言ひ、小隊の兵を元氣づける。太田上下兵のみ残つて貰ふ。人々は皆元氣に山を登つて行く。残念だが仕方がない。足が痛くて一步も歩けない。

又長い／＼時間を此の岩陰に過ごす事となる。雲溪崖の頂上の攻撃は成功しないのか、相変らずバタ／＼敵の自動火器が騒いで居る。腹背に敵を受けて、又昨日と同じ調子だ。八時、九時、段々時が過ぐ。傷は益々痛む。うづいてどうにも仕様がなない。

午後五時一先づ下山して、夜になったら医ム室に帰る事とし、山を一寸いざりにずつて降り始む。平瀬が少々傷して来て居る。約一時間半かゝつてやうやく七時半山を降りる。支那兵はウヨ／＼

して居り、何か声高に話して居るのがはっきり聞える。気持の悪いものだ。夕食を食べて午後八時二十分、太田に背負はれて出かける。月明りで危険な事此の上なし。此の気持ち、あゝ……。

此の時誰か近づく者あり。誰か！「友軍」「山」「川」、行つて見れば、加藤彦松上等兵が手榴弾でやられて、全員破片傷を受け、桜井上卜兵と共に帰る途中と判る。昨日五中隊苦戦の跡に行く。畝田や藤田・水島・伊坂等、無念さうに月明りの下に噎れて居る。あたりは飯盒・円匙等散乱して居り、独り涙が出る。此処から太田に背負はれて一路危地を脱し、途中六中隊の兵等に会ひ乍ら、やうやくへトくになつて医ム室に到着しほつとする。

あゝ命だけは助かつたと言ふ気持、感謝と安心、足の痛さも忘れて居たが、又ツキく痛み出す。自室に帰つて眠る。俺がやられたと聞き、皆残念がつて見舞ひに来てくれる。有難い事だ。

夜半チャンコロが俺の室に入り込み驚く。然し士民らしく、何らの事も起らなかつた。

九月四日 曇天

足の痛さに悪夢を見て、ねむれなかつた夜も明ける。朝早く医ム室に行く。背囊・私物品を整理す。内山君・大橋・寺前・吉田栄等も負傷して来て居る。担架を待つも来らず、迫撃砲におびえ乍ら時を待つ。午後五時半、待ちに待つた担架来たり、先づ仮ホータイ所に到り休む。軍医は手当をし直し乍ら、軽傷だから一週間位で原隊復帰だと言ふ。大難が小難だつたんだ、不幸中の幸ひとは此の事だ、此れも皆神仏様のお蔭で軽くて済んだのだ。然し歩

けぬのでほとく困る。

九月五日 晴天

午前八時、仮ホータイ所を出て易家湾に到着、自動車を待つ。此処には大行李居り、河端の兄さんに会ひ親切にしていたゞく。みかん一ケ、タバコ等貰ひ、やがて自動車にて瑞昌に到る。谷沢部隊の子備病院に収容される。此の病院には俺と内山君と二人だけ、後は台湾軍の戦傷者が十数名居る。蠅の多い馬小屋の中で、臭気ぶんくとして居り、きたない所だ。此れでも病院である。足をやられ居る者、頭・腕の骨折等さまざま、皆苦労して来たのであらう。福島兄面会に来て下さる。一日中重迫撃砲弾に困る。

九月六日 晴天

軍用自動車・人馬の往来はげしい道筋の室、ほこりをかぶり乍ら寝て居る。それでも休んで居る時は傷も痛まぬし、第一線将士の事を思ふと極楽である。それにしても雲溪崖の占領は、まだ完全にゆかぬそうだ。どんなに残念な事だらう。

午後、高間軍曹訪ねて来る。野戦の無傷の高間も、とうく負傷した。互に軽傷なりし事を喜び合ふ。川口軍曹戦死の事を聞く。

中隊も今では二十八名しか山上に居らなかつた由、大隊全部の苦戦の情況が思はれる。今日百四十名程九江に後送さる。

九月七日 晴天

夜明けと共に台湾軍の兵等後送さる。高間軍曹も後送と決る。昨日午後、中隊の負傷兵達帰つて来た者の談によれば、松田曹長・山下伍長・川下伍長等も、遂に戦死した由、其の他にもある様子、

ほんとにお気の毒な事だ。兵の中にも戦死傷ある事であらう。中隊も十数名か二十名位であらう。残念な事だ。然し、雲溪崖も完全^全に占領出来た由、何よりもうれしい。多数の犠牲者のお蔭である。我々の負傷も無駄にはならなかった。地下の英霊も瞑福するであらう。

九月八日 晴天

「午前早く、台湾軍の同室の戦友達九江に後送になる。高間軍曹も下る。午後、二名残った軍夫長と、兵一名も後送になり、俺と内山君とたった二人だけポツンと残されて淋しい。早く後送してほしいなあ。」

「内ハ抹消サレテイル」
ほこりがひどい。午前九時、内山君も後送と決り、十一時、船にて九江に向ふ。ほんの一人残されてしまった。淋しい。近衛の後備さん連中が、遊びに来てくれるのが何より楽しい。

一人ではるゑの手紙を出して読んで見たり、楽しい写真を見たりして日を送る。夕方、台湾軍の捻坐患者^{マツ}二名入院す。塚谷のやうな心の持主だらう。

九月九日 曇天

待つて居た九江後送にもならず、午前中、余り此の部屋はほこりが多い故、奥の方へ引越す。第二号室から相当重い患者二人も来る。一人は第十一中隊の者で胸部盲管である。身が不自由故、俺の手で小便を取ったり、飯を食べさせたりして上げる。

夕方、二、三十名の内科の患者入院す。主としてマラリヤが多い。然し中には、ねぢ鉢巻で元氣者もある。大方戦争が恐ろしくなり、

命が惜しいのであらう。実に情ない奴達だ。

今日は身体の具合も大分よくなり、少し位はちんば乍らも歩けるやうになり、休んで居りさえすれば痛くないやうになった。

九月十日 晴天

遂に思ひ出の九月十日が訪れた。去年の今日の事を、ちっと眼をつぶつて思ひ出して見る。夜明け方の赤紙受領、土正の稲刈り、午後の大道行き、千代二さんと兄さんとはるゑを交へて、夜更けも忘れての話、あの晩の思ひもかけぬ大道泊り、はるゑとの楽しい情熱の一夜、あゝほんとにうれしかった。二人が感極つて、柔い肌と肌の間にとり汗ばんだのも忘れて、何時までも離れじと唇を合せ、身体も溶けるやうな快感に、うっとり抱き合つて居た、あの夜の思ひ出。はるゑもきつと今頃思ひ出して、去年と変り一人淋しい暮し、俺の唇恋しさ、青春の湧き立つ血潮の情にもだえて居るであらう。

然し、あの時動員下令にて出征した多数の将士は、皆気の毒に護国の英霊と化したのに、未だに負傷はしても健在で居る此の喜び、きつと輝く凱旋もある事ならん。

その時のはるゑとの、狂はしいまでに積りに積つた情熱の愛情の交歓こそ、片時も忘れぬ二人の生命である。余りにも運強い俺達二人、唯々神様仏様に感謝しなければならぬ。不幸だった戦死者の冥福を祈り、皇軍の武運を祈り、併せて二人の将来に幸多かれと祈る。

今日午後、いよいよ九江に後送と決定す。

自動車無く、後送の予定変更さる。

九月十一日 曇天

流石に昨夜はいろ／＼の思ひで一ぱいになり、夢見勝ちであった。

朝いよ／＼九江に送られる事になり、午前九時瑞昌出発。途中船却橋にて昼食。船により午後三時頃九江着。九江は沢山の彈薬・糧秣の山が積まれ、軍艦・汽船・発動機船等賑やかなものだ。

九江の街は、アスファルトの立派な都会。然し、支那人らしいもの殆んど見受けず。午後六時頃、九江第^(五)兵站病院に入院す。戦友達に会へるかと期待して居たのに、此処は平病患者の病院とて、伝染病もあり、面白くもない。食事分配だつて、エ生兵の親切さだつて、瑞昌の病院とは雲泥の差あり。

九月十二日 晴天

知らぬ人々の中に混じつて夜を明かす。隣に第六中隊の者居り、その隣に五中の平井と言ふ補充兵が居る。午後、八中の荒木遊びに来るし、少しは待屈まぎれとなる。

傷は日一日とよくなるのが判るやうだ。今日は少しは歩けるやうになった。今日で受傷後満十日だ。後十日で全快するかしら。恐らく未だ十五日位はかゝるかも知れぬ。俺とはまだまだ軽傷にて、もうすつかり癒つて居ても、原隊復帰する者は極で少ない。日本軍人として全く恥しくないのかしら。

九月十三日 曇天

昨年の今日は、はるゑと二人で遊びに行つて楽しかったものだった。あれから丸一年、鬼子母神様・藤島神社に参拝した、その御

加護の賜ならん、軽傷のみ負ふて、現在無事かうして命永らへて居るのは、何とも有難い事だ。

つれ／＼なるまゝに、戦争の思ひ出を書き始めた。

九月十四日 曇天

本日午後までに、走馬塘クリーク附近の戦斗の思ひ出、物語りを書き終る。此の頃二、三日毎日曇り勝ちにて涼しい。第一線部隊も気持良いであらう。第五兵站病院も、来る日も来る日も患者の入院引つきり無し。第一線の労苦を思ふ。午後、サボン二分一ヶ分配さる。

九月十五日 晴天

とても気持の良い秋晴れの日である。故郷ではお祭日だ。農林一号の刈り取りは終つたかしら。去年は丁度出征の前日とて、朝からあわた／＼しかった挨拶廻り、はるゑを迎へる記念撮影、最後の夜の思ひ出等、生々しい記憶ばかり。家の者始め大道の彼女等も、きつと思ひ出して居るであらう。

午前中福田君を、第四号B病棟に訪問し、いろ／＼話す。何しろ待屈でし様がない。誰か五中隊の者はないかと探せど居らず。酒保は無し、間食は無し、無為に日を送るのも並大抵ではない。夜は皆眠れぬまゝ、歌声やまず、賑やかだ。

九月十六日 晴天

此頃病院生活にも狎れて来たのか、少しは気持も落ち着き、淋しい気も無くなって来た。今朝、二十世紀梨一ヶ貫ふ。一ヶ年目に口にした梨、おいしかった。

九月十七日 曇天

昼寝をしたり、一度読んだ雑誌を又見たりして暮す。治療日。傷はよくなったが、中が痛くて歩行困難である。竹内猛君が入院との事を、師団輜重の清水君より聞く。明日の面会を楽しみに。

九月十八日 少雨

満州事変記念日也。朝早く竹内君を訪ねる。七年ぶりの面会、全く意外であった。平病で入院中である。積る話にお昼になったのも不知。

九月十九日 曇天

大変涼しくなってしまった。第一線は嘸朝晩寒い事であらう。小雨も降り苦勞が思ひやられる。陽新の陥落も未完成との事、武漢は何時の事か。又竹内君の所へ遊びに行く。

九月二十日 曇天

昨日に益して涼しい日也。竹内君に写真等見せてやる。今日は丁度、昨年の面会日から丸一ヶ年、営庭は賑やかだった。気の毒な遺家族の方達、きつと去年の事を思つて涙を流して居られる事であらう。静かに黙禱す。

九月二十一日 晴天

故郷宛手紙等少し書く。相変わらず、入れ代り立ち代り戦傷者入り来る。九師団の者余り見受けず。殆んど二十七D多し。

九月二十二日 晴

鯖江離れて丸一ヶ年、其の日くがはつきりと、一ヶ年前の事が記憶に甦る。鯖江駅の夜の光景、鯖江駅のはるゑ達との面会、思

ひ新た也。

九月二十三日 晴

石本孝二訪ねて来る。馬鹿げた男でも来ると楽しいものだ。山田寿信君も来る。四号室に一人戦傷死す。気の毒だ。

九月二十四日 晴天

第一線部隊に於ては、我部隊は既に大松に入ったと言ふ者、否、未だ陽新が陥落しないと云ふ者、いろくだ。将校病室にて講談あり。後、前田少尉と話す。前線の模様さっぱり判らず、楽しみなし。石本明日原隊復帰の由、俺も早く帰りたい。手紙を言伝てる。

九月二十五日 晴天

午前中石本来る。原隊復帰の由、無事到着を祈る。内地離れてより丸一ヶ年目、大阪小山様宛御手紙出す。

九月二十六日 晴天

此頃とても傷の方がよくなった。此の調子なら全快も近かるべし。第一線部隊の様子、各説まちく、余り前進もして居ないのが真実らし。

九月二十七日 晴天

昨夜来少々腹具合悪し。余り大食せし為めか。

九月二十八日 曇天

下痢をする。腹痛等にて困る。然し、午後になり大分よくなる。今朝は水道止り、皆んな困る。午後には直り、やっと食事給与せらる。下給品として羊羹とゼリ支給せらる。

九月二十九日 曇天

山田寿信君原隊復帰す。第一線は兵の不足にて困り居るとか、陽新は未だ陥落しないとかの噂なり。敵も全く頑張る。散髪、顔そり、気持よし。

九月三十日 雨天

昨夜来急に雨降りとなる。36 i に八十名余りの原隊復帰ある由、可愛さうだ。石本再び指が悪いとかにて、復帰取止めとはあきれた奴。金がないとて無心に来る。金貳円施してやる。

十月一日 雨天

大変な雨降り、到る処泥海と化し、自動車も困るらし。早や十月か！ 戦線の苦勞を思ふ。終日外にも出られず寝ころんで居る。

十月二日 晴天

雨降り止み日が照り出す。然し、下はやはり泥々だ。傷の方は大分良きも、未だ靴はいて行軍は出来さうにもない。原隊復帰も予定より遅れるばかり、慢々デーより仕方がない。

十月三日 晴天

負傷以来丸一ヶ月目、秋の夜空は奇麗だ。星はまたゞき、半月はくつきりと清く澄み、気持が良い。先月の今晚は、太田に背負はれて月の道をピューン／＼敵弾におびえ乍ら帰ったになり、と思ひ出す。

皎々と照る月を心から拝み、お題目を唱え故郷を想ふ。第一線は何処まで前進したやら、武運長久を神仏に祈願する。

十月四日 晴天

秋晴れの良い天気だ。室内に居るのは勿体ない位。然し此の病院

は、やかましくて一步も外へ出られず、酒保も販売せず、面白い事もない。夕方病院内を散歩す。足は大分よきも、未だ駆足が出来ない。先づ全快は十五日頃になるやも知れぬ。

十月五日 薄曇り

酒保に行つて見る。約三百名位が並んで待つて居る。全くあきれてしまった。買物は止めにする。

十月六日 晴れ

西森中尉殿に会ふ。不思議に約五厘位の差で、命を取り止めたと話される。尚武漢は、十一月一ぱい落ちぬだらうとの心細い話。

十月七日 晴天

此頃病棟の南に新病舎新築を始む。大変な事だ。然し、昨今入院者少し。

十月八日 晴天

暖かである。暑いのにやりきれぬ。皆々裸暮し。夜、美しい十四日月に向つて、約一時間お題目を唱へる。心の底まで美しくなつた様だ。

十月九日 薄曇り

暑い／＼真夏のやうだ。今日は、林大尉等戦死後丸一ヶ年だ。静(まご)に冥想(まご)にふける。

十月十日 晴天

昨日と同じに暑い。前田少尉等呑気。少尉三人原隊復帰す。
(十一日ト十二日ノ記事ハナイ)

十月十三日 霧雨

寒くなつた。全く寒い。第一線の労苦思ひやられる。身体の具合益々良好なり。

十月十四日 雨

寒風あり。院長より原隊復帰を命ぜられた者、四号にも数名あり。平井も其の一人である。久ぶりに入浴へ入る。

十月十五日 晴天 寒風あり

南病棟、知らぬ間に余り立派に立つてビックリす。今日は鯖江の招魂際の日、思ひ出豊かなり。

十月十六日 晴天

朝早く平井帰隊す。尚、看護婦さん来る。皆々朗らかになった。何だかお母さんが来た様な、甘えたい気持がする。此れがはるゑだったらなーと思ふ。

十月十七日 晴天

西森中尉の下に行き、長く話して帰る。午後三時頃より、報知新聞記者、井口静波氏慰問に來り、長時間に亘り浪花節・漫談一席。とても痛快、抱腹絶倒、面白く実に愉快であつた。

十月十八日 晴天

今日はずいぶん暖い日であつた。竹内君遊びに來る。此頃はずいぶん甘いものを買へて楽しみだ。戦傷患者又來る。第一線の状況、新聞・ニュース等で片輪を知る事を得。南支上陸、広東方面の戦況は、全く素晴らしい感がする。

十月十九日 晴天

午後、竹内君と木下と三人で外出す。始めての外出だ。九江の街は賑やかだ。皆々軍人。今日原隊復帰を志願すれど、未だ駄目と言はれた。もう数日後には必ずするつもり。

後方には如何に非戦闘員の多きかを知る。ぜんざい・ぼた餅等食べる。P屋もある。日本・朝鮮P居るも、きたない顔の者ばかり。第四兵站病院に行き島に会ふ。又水上君にも会ふ。水上は明日原隊復帰の由也。富田軍曹を物品集積所に訪ね、夕食を御馳走になり、帰りに砂糖・缶詰等貰ひ、午後五時五十分頃帰る。夜は西森中尉の下に行き話しする。本日は靖国神社大祭日なり。英霊の瞑福を祈る。

十月二十日 晴天

午前十時、陸軍音楽隊慰問に來る。気持よいリズムに乗って、我々聴衆も知らず／＼合唱、一大コーラスとなる。「天国ト地獄」「攻撃」「森ノ鍛冶屋」「新内流シ」「日ノ丸行進曲」「露管ノ歌」「慰問袋」「上海便り」「君カ代」等、他に数曲あり、実に朗らかな気分になる。尚、今日音楽隊と同行に、久米正雄・西条八十・古関(フツ)欲而の大先生居り、皆々サイン責めにて大した騒ぎだった。米国記者も慰問に來る。

十月二十一日 晴天

前線も大分進展せる由。殊に海軍部隊の進撃目ざましい。第九、第二十七は咸寧に■近づき、北支軍又有利に進軍の由也。南支軍は広東十里手前に進出、蒋介石も重慶に逃亡せるとか、或は案外武漢陥落早きかも判らない。

午後三時、畑大将閣下慰問に来られる。一々丁寧に「お大事に！」と、慰問の言葉をいたゞき感激す。

十月二十二日 晴天

本日漸く原隊復帰の許可下る。廿四日退院と決定す。婦長さんと話しをする。お母さんを見るやうな優しい人だ。実に看護婦も苦勞して居る事が判る。

十月二十三日 晴天

中村修二に会ふ。小林少尉にも面会する。土本・太田等元氣の由、何より嬉しく思ふ。本日は明日の退院準備。

十月二十四日 曇天

朝早起きして、西森中尉等に挨拶に行き、背ノを背負つて発著部に行く。自動車にて午前十時出発、盧山の下の名譽訓練所に入所す。鄱揚湖(湖)を下に見て、全く氣持良い処なり。飯田・水上・平瀬・大平等に会ふ。

十月二十五日 曇天

訓練所へ来てから妙に頭痛がし出し、今日は大分悪い。為す事もなく寝ころんで居る。余興会あり、面白かった。

十月二十六日 曇天少雨

朝、平井榮に会ふ。明日原隊復帰との由なり。熱あり困る。診断を受ける。風邪との事、アスピリンを貰ふ。午後、陸軍軍樂隊来る。此の前のやうに楽しく聴かせてくれた。夜は、寒くなったり暑くなったり、汗ビッシヨリとなり苦しむ。

十月二十七日 曇天

発熱の爲め伏臥、此処へは何しに来た事が判らない。病氣しに来たやうなものだ。面白くもなし。

拾月廿八日 雨天

原隊復帰を志願す。水上上等兵明日帰る由。

拾月廿九日 曇天

明日、平瀬・大平・長田等帰る由、俺も是非帰せと申出て、遂に口論してしまった。此処の山本伍長と言ふ男、実に馬鹿な奴だ。

(十月三十日ノ記事モナイ)。

拾月卅一日 晴天

卅日の原隊復帰は駄目になり、遂に今日飯田と二人帰る事となりしに、あに計らんや、俺一人だけ九江警備要員となる。総員八十二名、馬鹿らしくなる。午後十二時半出発、

午前後二時九江到着、兵站病舎に入る。

(コノ次ノ頁ニ左ノメモガアル)

「箸紛失致しました。」

歩上 山本一十郎

へ歩三五 一ホ小

十一月一日 晴天

先着の水上君等に会ひ、遊びに行く。午後外出す。冬服と交還(返)。

十一月二日 曇天

午後外出、第四兵病(病脱カ)に赴き、上木・森本・浜崎等に会ふ。第五兵病を訪ねて竹内君等を見舞ひ、帰りに水上君と二人で富田軍曹の処に行き、沢山御馳走にあづかる。まびフライ全くうまかった。

入浴に入り、午後七時帰る。

十一月三日 曇天

明治節の佳き日也。兵站宿舎に明治節を迎へようとは思はなかつた。原隊復帰者も船がなくて帰れぬ由、皆陽新から引き帰して来る。一日中花合せして外出せず。

三 覚書

* (写真15)

前

10 武被手入

* 八月拾七日上番衛兵

司令 山本軍曹

歩哨掛 土本上卜兵

歩哨 石井安エ

小林□二

磯谷平五郎

鈴木重吉

亘 守一

松下 栄

*山本 土本 太田 吉川 藤沢

田中 大橋

後

体棒剣術

湯谷 亘 芳井

山下 加ト 前田 平瀬

黒川 矢崎 大川 山下

高間 内田 前川 五十谷

川下伍長 中村修二

長谷川海陸 飯田四郎

* 八月廿六日 落伍者

1 小林末男 中村修二

2 西村安則 飯田四郎 五十谷勉三

寺前弘 細井正夫 小川 新谷

3 長谷川海陸 東作太郎 小形清和

4 浜崎松太郎 森本

5 大川□男 斎藤

* 山本 土本 小林 太田

吉川 山本 藤沢 中村

6 一〇〇〇二

5 二五〇

4 九〇

3 二八

2 九〇

1 二八二

〔 〕内は鉛筆

*八月三十日 吳附近ノ戦斗

斥候長 田中伍長

兵 平井光房 土本 蒨 黒川清則

平瀬芳成 大橋 信 岡田貫太郎

連絡其ノ他特に功アリタル者

加藤彦松 平井光房 土本 蒨

黒川清則 高間分隊 川下分隊

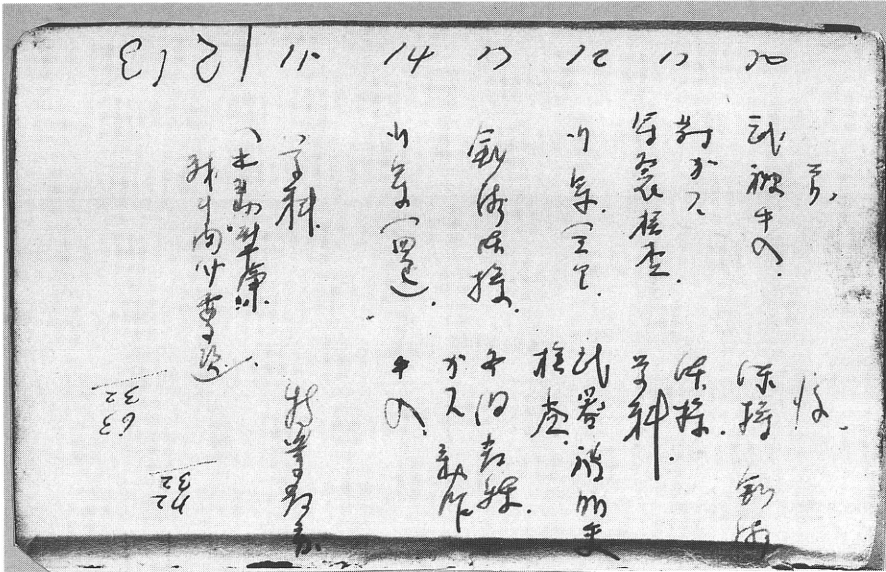
戦果 捕虜 二名

敵数百名の虚を射撃シ、多大ノ損害ヲ与フ。

大隊先遣小隊トシテ、午前十時吳ヲ占領、主力ノ進出ヲ援護

田中斥候殊勲ト認ム。

(写真15)



(万年筆)